

文化財実習報告書 第6集



2024

龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻

2023 年度 文化財実習の概要

1. 実習概要

文化財実習は、文化財の基本的な取り扱いや調査・写真記録の取り方、科学機器を用いた調査、調査報告のまとめ、活用などに関する講義を実践してきた。今年度は、調査報告作成や文化財活用、広報など学芸分野で必須の技能となる illustrator や InDesign、Premiere を使い、絵図や実測の書き起こしを中心に基本操作を最初に学修した。次に、文化財における資料の写真撮影を行い、分析事例を座学にて紹介した。撮影した典籍や金属資料を用いて、顕微鏡、蛍光 X 線分析装置、分光測色器、X 線透過撮影装置、赤外線写真撮影、赤外分光分析装置による科学分析実習やカメラやドローンによる 3D 計測（写真測量）を行った。実地見学では、座学で伝えられない奈良県の文化財を中心とした整理・展示作業や世界遺産登録に向けた飛鳥・橿原地域の取り組み、埋蔵・伝世文化財の修理作業について様々な知見を得る機会となった。



写真撮影実習風景（屋内と屋外）

実習は、杉山洋（文化遺産学専攻教授）・山田卓司（同講師）が担当し、ティーチングアシスタントとして前川（同 MI）と森岡（同 MI）が補佐した。実習参加者は、下記の通りである。

受講生

哲学科 教育学専攻 森 音々

歴史学科 東洋史学専攻 水谷 凜

歴史学科 日本史学専攻 藤田 悠華

歴史学科 文化遺産学専攻 赤坂 咲衣、池浦 里咲、池田 匠弥、石橋 初音、伊藤 鴻司、稲垣 杏奈、浦天音、親川 茜音、片岡 亜希、金井 セピアアイシャエルフィアン、川崎 凜、川村 心之輔、木井 荘太、岸本 悠馬、北岡 正充、北澤 蒼梧、鋏田 健太朗、小谷 彩翔、小林 永都、笹山 和寛、関元 隆明、竹中 彬子、立花 一佳、大川 由翔、鈴木 遥香、谷田 朱里、出口 新、中尾 有希、中村 幸世、永野 莞作、西村 雪、西本 将太郎、萩田 雅己、蓮井 怜香、平田 凌大、舟田 涼乃、堀川 楓華、政川 綾音、増田 寛之、松井 調、松尾 野々花、南 陸斗、宮崎 なな、村崎 結愛、森 えりか、藪中 美月、山口 千穂、吉田 将司、和田 茉薫、瀧 欣怡（計52名）

2. 実地見学について

2-1.（令和5年8月10日）橿原考古学研究所（午前）、飛鳥・藤原地区（午後）

2023 年度文化財実習学外研修は、第一回として、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の見学を午前中に行い、午後は希望者のみ、飛鳥藤原地区の見学を行った。

今回、この地域を選んだ理由として、本年上半期から当該地区の世界遺産への登録に関して、具体的な動きが表面化し、奈良県や地元橿原市、明日香村などが積極的に広報活動に取り組み始めた。本学での文化遺産学専攻において、こうした文化遺産の置かれた社会的な位置と問題点への理解が、教学上の主要目的の一つであり、今回の実習の見学地として時宜に沿った内容と判断して、当該地を半日、見学を行うこととした。

午後の最初は、橿原市木之本町の奈良文化財研究所藤原資料館を見学した。ここは奈良文化財研究所の飛鳥藤原地区の調査部局の事務所に併設された資料館であり、藤原宮の発掘成果を実際の出土遺物を目にしながら理解できるとともに、瓦と土器の編年資料を一室にまとめて展示している点に特徴がある。次に今回の世界遺産登録の中心自治体の一つである明日香村の資料室を訪ねた。資料室として規模は小さいが、石上遺跡と水落遺跡に隣接した地に建てられた資料館で、遺跡博物館としての立地を兼ねた展示施設の好例である。最後に奈良県立万葉文化館を訪ねた。ここは博物館建設前の発掘調査によって、富本銭などを大規模に鑄造した飛鳥池遺跡の存在が知られ、その保存と博物館建設という、文化財行政がこれまで幾度となく直面してきた課題を実際のものとして体験することのできる稀有な博物館である。また展示室には等身大の人物像や建物模型で、当時の生活や手工業の様子をジオラマ展示しており、遺跡の展示方法のとしても、革新的な博物館である。

また見学の折々には、世界遺産登録に関する諸問題や、登録後の遺跡が直面する様々な問題点を提起し、見学終了後に感想としてレスポンス上でアンケートを取った。その結果は奈良県の担当課である奈良県庁文化・教育・くらし創造部世界遺産室に参考意見として一部を報告しており、官と学が文化遺産の世界遺産登録を目途とした協力関係を醸成する一助となる方向も探るようにした。



見学風景(橿原考古学研究所附属博物館と万葉文化館)

2-2. (令和5年8月30日)元興寺文化財研究所

55年以上にわたり埋蔵・伝世文化財の調査研究および修復に携わる公益財団法人元興寺文化財研究所(奈良市南肘塚町)を訪ねた。元興寺文化財研究所は、奈良市菅原遺跡の発掘調査、国宝島根県荒神谷遺跡出土銅剣の修理、重要文化財奈良県メスリ山古墳出土大型円筒埴輪の修理、ユネスコ世界記憶遺産登録資料白樺日誌の調査、発掘された日本列島の展示・運送などの開催支援業務など、幅広い文化財の調査・修理・活用を行う調査研究機関である。

研究所の見学では、全体説明を受けた後、埋蔵文化財保存研究グループ(金属器・土器)、文化財調査修復研究グループ(伝世品・記録資料)を見学し、実際の調査・修理作業を目の前で見ながら、各作業の工程について専門員から説明を聞き、質問に対する回答を受けた。



元興寺文化財研究所の見学風景（全体説明と埋蔵文化財保存研究グループ（土器））

2-3. 見学レポートについて

時間的な制約などはあったが整理や展示、調査、修理現場を実際に訪れた。発掘資料の整理・展示や文化財の修理、文化財行政の実際を知ることは、今後の卒論や研究で直接関連する学生にとって幅広い知見を得るよい機会になったものと思われる。行動制限もなくなり、見学を機に積極的に現場へ赴き、質問する気概を学生には期待したい。以降では、上記見学先で学生が自ら感じた感想や事後学修での調査をレポートにまとめたものを学籍番号順に掲載する。また、上記日程に参加できなかった学生は、文化財修復・展示棟を備えるなら歴史芸術文化村や帰省先などで紹介したい地元ならではの博物館を自主的に見学しレポートにまとめている。

なお、業務等が忙しい中、見学の説明などで時間を融通していただいた見学先の皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

報告書表紙画像：観察分析実習で使用した郷土研究 上方 第124号（昭和16年4月）石山本願寺号表紙木版画

3. 文化財実習レポート

文化財資料の修復保存

L210681 水谷 凜

8月30日、元興寺文化財研究所総合文化財センターを見学させていただいた。「京終」駅には降り立つのも初めてだったし、そもそも何と読むのか?とあったのを覚えている。

この施設は昭和36年に元興寺境内にて発掘調査室が発掘調査を実施し、資料調査室を立ち上げ、昭和42年に財団法人元興寺仏教民俗資料研究所として認可を受けた。現在では文化財や土器、金属製品の調査・保存修理や紙資料の保存修復・調査を行っている。

私が特に興味を持ったのは、文化財資料を保存・修復することの大変さである。展示などで活用することで、文化財資料は人々の文化や教育の向上に大きく貢献する。しかし、その分資料は損傷や摩耗、破損のリスクが高まってしまう。

この施設では文化財企画活用室、文化財調査修復研究グループ、埋蔵文化財保存研究グループ、保存科学研究室に分かれて色々な文化財資料の保存・修復・研究にあたっており、見学に訪れた際も修復作業が行われていた。修復されている資料には手作業で行われているものもあり、ガラス越しとはいえ直接その現場を見ることができたのは貴重な経験だった。

大堀 哲・水嶋英治の『博物館学 IV—博物館資料保存論*博物館実習論』では、修復保存における作業は、よく医療に例えられるとしている。「診察」にあたる調査では資料の詳細な観察、この結果や資料の保管・展示環境などの調査カルテを参考に「診断」が下され、この診断に対する「治療」方法の検討に入るといふ。資料の持つ価値を損なうことのないよう、最大限に考慮し、その治療後は定期的に「検診」を行うことで資料の修復箇所の調査や手当をすることが必要だとしている。

文化財資料は人間ではないが、温度・湿度など環境の管理が必要だったり、活用によって劣化し、定期的な修理や保存方法の見直しをしたりすることを考えれば、生きているといえるだろう。この見学を

通して文化財などの保存・研究・修理を身近に感じ、生きた資料と向き合う姿勢に触れることができたと考えている。

参考文献

- 元興寺文化財研究所 総合文化財センター 施設見学の手引き
元興寺文化財研究所 公式サイト
<http://www.gangoji.or.jp/>
大堀 哲 水嶋英治 『博物館学 IV—博物館資料保存論*博物館実習論』学文社 2013年

夏季見学レポート

～元興寺文化財研究所 総合文化財センター～

L210760 赤坂咲衣

元興寺文化財研究所

1961年、元興寺極楽堂・禅室の解体修理と境内発掘調査の際に発見された約10万点にも及ぶ仏教民族資料を学際的に調査・整理し、「どのように保存していくか」を研究することから出発した。

1967年、財団法人元興寺仏教民俗資料研究所として認可(文化財保護委員会認可)される。

1978年、財団法人元興寺仏教民俗資料研究所寄付行為の一部変更について文部大臣の認可を受け、法人名を財団法人元興寺文化財研究所と改名。扱うものを文化財全般に広げた。

現在では、全国各地の多様な文化財を調査・研究する民間唯一の研究所へと発展した。

見学して

金属でできた遺物は、土の中に埋まっている間に錆びたり、掘り出したことで錆が発生したりすることがある。金属製品の保存処理では、錆を除去し、脱塩処理、樹脂コーティングなどをして錆の進行をとめている。

紙資料について、日本の古文書の大敵は、東アジア特有の高温多湿な気候と害虫。地方に残されている近世文書の中には、湿気や虫食いで利用できないほど傷んだ文書が大量にある。修復の4原則(原形保存・可逆性・安全性・記録)に留意しながら修復している。すきばめ(リーフキャスト)は、

虫食いや欠損があるところだけに水にとかした和紙繊維を充填するという方法は興味深かった。

出土した木製品は水分を多く含むため、乾燥すると縮んだり、割れたり、反ったり、ねじれたりして形が変わってしまう。そのため木製品を薬剤に浸し、その中に含まれている水と薬剤を入れ替える（薬剤含浸）。薬剤が固化するのと一緒に木製品もそのまま固まり、形を維持することができる。

伝世資料は使用により破損していたり、大切なものという認識のため、人目から隔離されたりすることで、知らず知らずのうちに虫や小動物による被害を受けていたりする。研究所では、伝統的な修理方法に加えて、保存科学の考え方をういた方法や材料を駆使し、資料を後世に伝えるため日々修理を行っている。

《参考文献》

元興寺文化財研究所公式サイト

<http://www.gangoji.or.jp/kenkyusho/jap/top/top.html>

元興寺文化財研究所 総合文化財センター 施設見学の手引き

橿原考古学研究所附属博物館の役割

L210761 池浦里咲

夏期見学では奈良県立橿原考古学研究所へ見学に行った。現地見学を通じて奈良県立橿原考古学研究所は研究所附属博物館としての役割を果たすための空間づくりがされていることが理解できた。その理由を2点にまとめて挙げる。

第一に奈良県の研究機関の附属博物館のため国宝・重要文化財・県指定文化財等の展示が可能な施設だということを挙げる。橿原考古学研究所ではケースの密閉性が高く湿度を中でコントロールできるエアタイトケースを使用しており、金属製の指定文化財にも対応できる設備が整えられている。また、展示ケース内も空気中の水分を吸収することで湿度を調節するアートソープが使用されておりより確実に遺物を保存しながら展示する仕組みが整えられている。市町村が運営する展示施設では金銭的な問題から国宝や重要文化財を展示できるまで整備が行き届いていない実態が多い。そのような中で

奈良県の研究所として運営されているからこそ設備の整った展示空間が作られていることが理解できた。

第二に橿原考古学研究所附属博物館の多様な展示内容を挙げることができる。

橿原考古学研究所附属博物館は奈良県の様々な遺物が展示されている。展示内容は旧石器時代から室町時代まで幅広い展示内容となっておりそれぞれの時代の象徴となる遺物の展示が工夫されていた。例えば、縄文時代のコーナーでは部屋の中央付近に祭祀で使用された遺物だけを集めたコーナーが設けられていた。通常の博物館であれば遺跡ごとに展示したり、時代ごとに並べるなどして同じ用途として使用されているものでも距離を空けて展示することが多い。けれども、橿原考古学研究所附属博物館では出土地も年代も異なる土偶が数十個も同じ場所に集められている。土偶と同じケースには同じく祭祀で使用したとみられる遺物も展示されていた。このような時代ごとに置くのではなくランダムに遺物を並べる手法には賛否両論あるかもしれないがその時代の祭祀の特色が分かりやすくしめされており良いのではないかと感じた。このようにして、各時代の特色をわかりやすく示す展示内容は様々な時代または種類の遺物を管理しているからこそできることであると感ぜられた。

このようなことから、橿原考古学研究所附属博物館を見学することで奈良県全体を範囲とした研究所の博物館としての役割が果たされているということがよく理解できた。

参考文献

・03kashiharaarclgl .pdf (pref.nara.jp) (最終閲覧日 9月20日)

文化財実習 見学レポート

L210762 池田匠弥

8月30日に元興寺文化財研究所総合文化財センターに施設見学に伺った。当たり前のことであるが、大学の文化財科学室より規模が大きいと感じた。

私自身、科学については、あまり得意ではなく、理解が足りないところもあったが、実際に修復の現場を見ることで、どのように文化財が修復されているのかというものを知ることができ、貴重な機会だったように思う。

実際に、館内を見学しての感想に入るが、保存修復だけではなく、文化財の調査も行ってたのは驚いたが、総合文化財センターであるから文化財に関することはおおかたしてしまうのだろうと考えた。そのことに関して、文化財を撮影するスタジオも併設しており、さまざまなアングルから文化財を撮影できるよう設備が整っていた。

文化財保存修復については、木製品(今回行った場所では行なわれていなかった)、金属製品、土器、紙資料、伝世資料の保存修復が行われていた。その中でも特に印象に残ったのは、伝世資料の修復現場だ。大きい機械があり、重い石のモノを吊り上げ、移動させるためのもので、重い石でも修復に使われるというものだ。伝世資料は民俗的な資料があった印象だった。

金属製品は、大きい機械により、脱塩処理、BTA処理を行いさらに、樹脂を染み込ませることにより錆をとり、新たな錆を防ぐ役割を担っている。

土器の修理現場では土器の破片を丁寧に繋げて修復作業をしているのが印象的であった。

今回、実際に現場を見て以前よりも保存修復に興味を持った。

文化財のあるべき姿、そしてそれを後世に伝えていくための予防も然り、文化財に合わせて修復を行なっていく必要があると思う。

また、科学的な知識も必要かもしれないが、やはり実際にモノに触れるとなると技術というものが大事になってくると考えた。文化財の保存修復に携わる方々というのは分かってはいたが、やはりすごい人たちなのだなと感じた。価値の高いモノを修復するというのはかなりプレッシャーがかかる事だと思う。

今回は、掘り下げができなかったが、保存修復技法の歴史というものについて機会があれば調査してみたいと考えた。現在ではハイテクな機械を用いて行われている所もあると思うが、過去はどのように調査、修復等行っていたのか調べたい。

元興寺文化財研究所を見学して

L210763 石橋初音

元興寺文化財研究所を見学して、研究所でどのようなことが行われているのかや研究所がどのような経緯で設立されたかを実際に知ることができた。本レポートではその感想と見学の中で気づいた点について述べていきたい。

まず研究所について、元興寺研究所は解体修理の際に発見された佛教民族資料の研究のため元興寺内にある研究所として発足したのが始まりである。研究所内は保存処理法の研究開発などを行う保存科学グループ、発掘や調査を行う文化財調査修復研究グループ、保存処理などを行う埋蔵文化財保存研究グループ、赤外線やX線での撮影やイベント計画などを行う文化財企画活用室の4つのグループで組織されており分担して作業が行われている。

施設を見学して、まずは修復室や整理室、撮影室など上記の4つのグループの中でも更に作業が細分化されており、まずX線撮影で状態を確認してから修復の方針を決めるなどそれぞれが綿密に連携して作業が行われているということが分かった。その中でも特に文化財企画活用室について研究所において文化財の修復や整理だけではなく博物館の展示支援やイベント企画なども行っているというお話を聞いて様々なことが幅広く行われているという点が印象に残った。また研究室や整理室、修復室などの部屋においても作業内容は違えども多くの作業が人の手で丁寧に行われている印象を受けた。特に記録資料修復室において小さい紙資料を剥がす作業を見て、扱う文化財一つ一つにしっかり向き合うことが大切だと言うことが分かった。更に見学中の説明の中で可逆性を念頭に置いた復元を行っているというお話があった。文化財を復元していく中で土器片などを接合する際にすぐにとることが可能な接着剤を使用するなどより確実に復元するための工夫を窺うことができた。

今回の元興寺文化財研究所への見学を通して、普段では見ることのできない文化財の修復や研究

の現場を見ることができた貴重な経験であった。今回学んだことを今後の学習にも生かしていきたい。

文化財実習夏季見学レポート

L210764 伊藤鴻司

なら歴史文化芸術村では、さまざまな文化財の修復現場を見学することができた。その中でも、當麻寺仁王像・野迫川村平区釈迦像・光堂寺四天王像を取り上げる。

當麻寺仁王像は、阿形像の頭部に蜂が巣をつけたことや、汚損がすすんでいたことから、阿形像・吽形像ともに令和三年から修復が行われている。阿形像は、内部につくられた巣の影響で、口部や玉眼が非常に汚損していた。見学時は阿形像の修復途中であり、取り外されてクリーニングされた玉眼や天衣を間近で見ることができた。

平区釈迦像は、仏像の大部分に後補の塗料が残っており、それらを除去する処理が行われている。腕部には金が残し、作成当初は全体に鍍金が施されていたと推測できるが、頭部を除く大部分に緑青が発生しており、後の時代に銅を含んだ塗料が塗布されたと考えられる。また、頭部には金色のペンキの様なものが塗布されており、こちらも後補のものと考えられる。修復では、これらの塗料を溶剤を用いて除去する方法が模索されている。有機溶剤は、後補の塗料のみならず、元の塗料や部材にも影響が出てしまう可能性や人体への影響などが考えられるため、使用には十分な精査が必要になる。

光堂寺四天王像は、奈良県指定文化財に指定されており、虫食いや経年による劣化・護摩祈祷によるものと思われる重度の汚れが見受けられたため、令和三年から修復が行われている。見学時は腕が外された状態であり、その力強いポーズや迫力のある形相は確認できたが、全体が黒くなってしまっており、細部までは見ることができなかった。これらの像は指定文化財になっているためか、詳細な成分分析ができておらず、おそらく煤だと想定できるものの確証までは至っていない。修復が進んでいく中で、確証はつかめるのかもしれないが、より早いタイミングでの成分分析を行うことができれば、修復の速度

や正確性があがるだろう。また、増長天に関して、ほかの像の土台になっている岩の様なものをまねて、土台を一から作っており、現状維持が重要視される修復において違和感を覚えた。

参考

“木造四天王立像”大和郡山市

<https://www.city.yamatokoriyama.lg.jp/> (2023年9月29日)

“當麻寺仁王像修理事業について”葛城市

<https://www.city.katsuragi.nara.jp/soshiki/rekishihakubutsukan/4/6/7379.html> (2023年9月30日)

元興寺文化財研究所を見学して

L210765 稲垣杏奈

今回、元興寺文化財研究所を訪れ、実際に文化財の修復現場を見学した。木製品、金属製品、石製品、紙資料などといった多種類かつ細かな手作業を施すものから、人の力では持ち上げることができない大きさのものまで、さまざまな文化財を取り扱っている。施設・設備や修復技術に関して学ぶことは勿論多くあった一方で、私はこの見学を通して改めて文化財の価値を認識し、文化財を通じた人との関わりについて考えた。

見学の際に、2011年の東日本大震災によって倒壊してしまった石塔を修復しているという話を伺った。倒壊によって一部欠けてしまった部分を補い、かなり綺麗な状態となっておりその技術に驚いた。そして、大地震に見舞われたが現地の方々の文化財を残していきたいという思いと、その思いに応える研究所の修復現場というそれぞれの立場に非常に興味を引かれた。さらに、元興寺文化財研究所では墓地石造物の悉皆調査を行っている。「近年、葬送環境の変化で墓じまいする人が多くなり、多くの墓地石造物が失われて」おり、「調査と記録化が急務」となっている。墓地石造物においても、「地域の歴史を語る重要な文化財」であるという態度を取り、調査と記録化をしている点から文化財に対する自己の知見が広がった。

国宝や重要文化財等に指定されていて、知っていたり見ることができたり、情報を得やすいなどといった文化財だけが、決して大切な文化財である訳ではないのだと今回の見学で実感した。近年、石造文化財の文化遺産としての価値が大きく見直されている。また一方で、石造文化財は「破損や盗難被害を受けやすいもの」でもある。このような側面を持つために価値を付けることは重要であると感じる。加えて文化財そのものに対する価値だけではなく、地域の中で大切にされているもの、それを人々が未来に繋げていきたいと思う気持ちが、文化財に価値を与え修復や保存・活用する意義があるのではないかと感じた。またそれが、人と人をつなげるひとつのきっかけになっていると考える。

【参考文献】

元興寺文化財研究所「公益財団法人元興寺文化財研究所要覧」2021

文化財実習 元興寺文化財研究所見学レポート
L210767 浦 天音

はじめに

元興寺は、奈良時代には崇佛派の蘇我氏による仏教政策や、朝廷（僧綱）の管理下にある三宝常住の官寺だった。しかし平安時代になると、律令制度の崩壊によって、官大寺は無くなり、権門寺院でもある興福寺や東大寺の支配下に組み込まれた。室町時代には、興福寺大乘院の支配となり、江戸時代には、西大寺直門として多くの重役を輩出した。しかし、明治になると、廃仏毀釈により門流が途絶え、無住化したが、昭和 17 年～36 年にかけて復興が行われた。

こうして復興した元興寺は昭和 36 年に境内の発掘調査を実施したところ、10 万点に及ぶ大量の資料が出土した。そのため仏教民俗資料研究所として元興寺文化財研究所が始まった。しばらくは仏教見民俗資料のみを扱う研究所だったが、1978 年に文化財全般を扱うようになった。現在は境内にあった研究所を移転し総合文化財センターとして活

動している。近年行った活動で代表的なものとして奈良市菅原遺跡の発掘調査が挙げられる。

研究所の活動

研究所は「保存科学グループ」「埋蔵文化財保存研究グループ」「文化財調査修復研究グループ」「文化財企画活用室」の 4 つの大きなグループに分かれている。今回話を聞いた中で印象に残ったのは、文化財調査修復研究グループの一室である伝世資料の修復であった。伝世資料とは製作当初から現在に至るまで残り、世に伝わり続けてきた資料である。この資料には仏像やからくり人形などの小物から、神社にあるような灯籠などの大きなものまで取り扱っている。伝世資料は使用による破損や虫や小動物による被害、地震などの災害による破損などの理由でボロボロになっている。そのような資料を伝統的な修理方法や材料を駆使して修復を行っている。石でできた物も修復をするので、部屋の中にはクレーンなどの大きさがある物や重さがあるものも運ぶことができるような設備があった。見学に行った際修復されていたものはからくり人形と、熊本の地震によって破損した灯籠であった。

終わりに

今回取り上げた内容のほかにも土器や紙の修復所、X線の利用設備、物を撮影するためのスタジオなど実際に見学してみなければわからない設備を多く紹介していただいた。X線の設備などは大学にあるよりも大きい物や、初めて見る装置などもあり、大変勉強になった。また、改めて修復作業や活用などの面でも文化財を勉強したいと思う。

元興寺文化財研究所を見学して

L210768 親川茜音

八月某日、文化財実習のフィールドワークのために奈良の元興寺文化財研究所にお邪魔して、研究所内の見学をさせていただいた。その際、この施設が日本における文化財保存科学の現場の最前線を行く施設のの一つであることを実感するとともに、文化財の保存科学というものについて改めて考えて

みようということを思い立った。そもそもなぜ文化財を保存していくために科学技術を応用しなければならないかという、文化財は環境的・人的を問わず様々な要因で劣化していくからである。文化財を次世代に受け継いでいくためには、文化財を劣化させる原因について直接アプローチする必要がある。そこで今回は、文化財保存科学という大きいくりのなかでも、特に文化財の劣化要因について述べていきたい。

文化財の劣化要因に入る前に、文化財の定義について今一度確認しておきたい。文化財とは、広義にはこれまで人類の文化的な活動の中で生み出されてきた有形・無形の文化的所産すべてを指す。しかし一般的には、文化財保護法に基づいて国宝、重要文化財、史跡、名勝、天然記念物等に選定、登録され保護の対象になっているもののことを言う。また、文化財は文化財保護法によって有形文化財、無形文化財、民族文化財、記念物、文化的景観、伝統建造物群に分類されている。

そして次に、これらの文化財を劣化させる要因について述べていく。文化財の劣化要因としてまず第一に挙げられるのは温・湿度の変化である。そして次が、可視光線や紫外線、赤外線などの光、その次が大気汚染や室内汚染などの空気汚染、次が微生物や昆虫や鳥等の動物、植物などによる生物被害、次が文化財を運搬・輸送する時などに生じる振動や衝撃、次が火災や地震や水害などの自然災害、そして最後が人間による盗難や破壊などである。もちろん、これらの要因の中には、保存科学のみでは対処できないものもある。しかし、温・湿度の変化や空気汚染や生物被害といった要因から文化財を保護する技術は日夜研究されており、実際に多くの文化財をこれらの被害から守っている。元興寺文化財センターをはじめとした、文化財保護研究施設の活躍により、次世代に受け継ぐことのできる文化財はこれからも増えていくだろう。

《参考文献》

東京文化財科学研究所編『文化財の保存環境』中央公論美術出版, 2011

私は今回、奈良元興寺文化財研究所で普段目にするのでできない様々な対象資料に応じた修復の過程や使用する機械、調査室を見学させていただいた。

数多くの見学箇所の中でも私は特に、実際に中に入れていただいた伝世品修復室が印象に残っている。伝世品全般を取り扱うということもあり、仏像の光背や石塔、人形浄瑠璃に用いる人形の頭部など、多種にわたる修復品を紹介していただいた。修復品が小ぶりである場合は作業台上で修復を行ったり、現場から持ち帰ったりといった作業が可能だが、巨大なものだとクレーンを使用するという作業形態を取ることは今回の見学を通し、初めて知る事が出来た。他にも石材を用いた文化財は紙や木製品に比べると形態の変化が少ないものの、石質が砂岩であったり、置かれていた環境が対象にとって悪いものであったりすると劣化の進行が早まるといったお話も興味深かった。これらの事から修復対象をただ材質ごとに分別するだけではなく、保存状態等も見極めた一つ一つへの柔軟で多様なアプローチが必要だと再確認した。

他には、金属を対象に用いられる脱塩処理を行う脱塩室も見学させていただいた。これは溶液に文化財を漬け込み、錆の元となる塩素を中から取り除くというもので、金属が利用された文化財の劣化の進行を防ぐための処理である。

今回の見学の中で研究所の方は一貫して、保存処理というのはあくまでも文化財の変化を緩やかにし、安定した状態を保たせるものだと言っていた。時間の経過による劣化はどうしても食い止められるものではない為、日々の地道な研究や保存処理の上でようやく今日まで文化財が伝えられ続けていると再認識させられたお言葉だった。

私は今回の見学で、自身の中で漠然としていた文化財修復の全体像をより明確に形作ることが出来るようになった。この貴重な経験を糧に、今後も文化遺産学を学ぶ一学生として、気を引き締めて学習に取り組みたいと思う。

文化財実習(ア)岡山県立博物館

L210771 川崎 凜

私はこの夏休みに岡山県立博物館を訪れた。その当時は、「慈悲のほとけ-観音と古寺の名宝-」という特別展覧会があり、折角あるのなら行ってみようということで最終日にいった。その特別展覧会は岡山県立博物館開館 50 周年記念として行われており、主に中国観音霊場に伝わる様々な観音像の魅力に迫り、歴史ある諸寺院に伝わる書画・彫刻の名宝を展覧していた。その中でひととき目立っていたのは岡山市に所在している法界院というお寺の「聖観音菩薩立像」という観音像であった。というのもこの立像は通常33年に一度のみ開扉されるという秘仏であるということだったので舐め回すように食い気味で展覧物を見たのを覚えている。この特別展覧会ではいろいろな関連行事を行っていて記念講演会や学芸員による展示解説、ワークショップ、展示品を見ながら学ぶ文化財講座、画家によるあなただけの千手観音を描く屋台などをしていた。記念講演会では「中国観音霊場と西国観音霊場」をテーマになんと龍谷ミュージアム副館長である石川知彦氏が講演を行っていた。残念ながら私は最終日に行ったのでどの関連行事にも行くことができなかった。それでも展覧会自体は普通に良かったことを覚えている。最終日にも関わらず私を含め多くの来客が来ていた。国宝級のものはないが、国指定の重要文化財が数点存在していてそのほとんどが観音菩薩立像であった。展示物は岡山にあるものだけでなく鳥取や広島、島根、山口などといった近隣の県からも蒐集していた。もうすでにこの特別展覧会は終了しているが、また別の特別展覧会を行っている。

この岡山県立博物館は特別展覧会を行うエリア以外にも3つの展示室からなっており、博物館のテーマ「岡山県の歴史と文化」のもと展示を行っている。エリアの1つは古代の時代かつて吉備国と呼ばれていた時代の文化財を保存・展示している。1つは近世に至るまでの文化財を展示している。残り1つは岡山県の伝統工芸品である刀剣や備前焼などを収集・展示している。アクセス面に関して日本

三大庭園の一つである後樂園の敷地内に存在しているので足を運びやすいといえるのではないだろうか。

始良 Tn 火山灰について

L210773 木井 荘太

檀原考古学研究所付属博物館常設展の旧石器時代のエリアにおいて、展示品をのせる台座の一つを始良(あいら) Tn 火山灰の層を置き、2つの時代が異なる石器の比較と時代区分の目安となるその火山灰層の説明を同時に行っていた。これを見て、2つのモノの年代を区別する際に、このような手法を用いており、斬新だと感じた。また、始良 Tn 火山灰層についても以前は名称を知っている程度であったが、どういったものなのか興味がわいてきた。

まず、始良とは、現在の鹿児島県の桜島を中心とする鹿児島湾が範囲の巨大なカルデラの名称である。この始良カルデラは今から約2万9千年前~2万6千年前に大噴火を起こし、そこで噴出した火山灰は日本のほぼ全土を覆い一つの地層を形成した。これが始良 Tn 火山灰である。火山灰層は短期間のうちに広範囲に降り積もる。そのため、火山が噴出した年代と発掘された遺物や遺跡がある地層の上下関係を調べつことで、その遺物や遺跡の年代を把握することができる。旧石器時代は期間が長い上に、遺物などの資料も少ないため、火山灰層を活用した年代測定も重要となってくる。特に、始良 Tn 火山灰層は旧石器時代の中頃かつ、ナイフ形石器文化の新旧を二分するような時代に降り積もっており、全国をカバーする正確な時間軸となっている。また、始良 Tn 火山灰の他にも、関東ローム層や鬼界アカホヤ火山灰などがある。

ナイフ形石器とは、主に石の片側を鋭くした石器である。ナイフ形石器文化の前半期は地域特有の技術はあまり見られず、全国で似たような形のものが多い。しかし、後半期には、東山型や国府型、杉久保型など地域によって特徴のあるナイフ形石器が形成されていった。

始良 Tn 火山灰について調べてみたが、この層に境に日本のナイフ形石器が地域によってそれぞれ

違った特徴が出てきており、資料の少ない旧石器時代の年代同定において重要な意味を持つ地層であることが分かった。また、日本は火山大国であるが、火山灰層による年代特定に適している環境でもあったと感じた。

〈参考文献〉

- ・鈴木公雄『争点日本の歴史第1巻原始編』新人物往来社 1990年
- ・稲田孝司・佐藤宏之『講座日本の考古学1旧石器時代(上)』青木書店 2010年
- ・稲田孝司・佐藤宏之『講座日本の考古学2旧石器時代(下)』青木書店 2010年

文化財実習レポート 元興寺文化財研究所見学 L210774 岸本悠馬

元興寺文化財研究所の見学では、研究所という組織がどのように文化財を取り扱っているのか、現場の実態を知ることができた。職員からの説明のほか、それぞれの作業の部屋の近くに解説パネルもあり、内容は非常にわかりやすいものであった。

研究所では、保存科学研究グループ・埋蔵文化財保存研究グループ・文化財調査修復研究グループの3グループに分かれて文化財を取り扱っていた。保存科学グループでは、文化財の科学的な調査・分析や保存処理方法の開発・改良を行っており、埋蔵文化財保存研究グループでは、発掘調査や遺跡から出土した埋蔵文化財を対象に保存処理や調査研究を行い、文化財調査修復研究グループでは、古文書や伝世品などの古文化財に関する調査研究・保存修復を行っているようであった。

保存処理は外部で行うこともあるようであり、現地で作業が完了するものもあれば、研究所に持ち帰って作業するものもあるようであった。研究所内での作業は、木製品を対象にした部屋や金属製品を対象にした部屋などそれぞれに分かれていたが、ある作業場では比較的広めの空間にクレーンがあり、重量のある文化財を動かせるような設備が整っていた。多くの部屋や充実した設備があり、保存処理する対象の幅広さを感じた。

展示がある部屋では、実際に使っている薬剤や保存処理した木材などがあったが、文化財の保存処理にはどのような薬剤を使って、その結果モノがどのような状態になるのか知らなかったから、非常に興味深かった。自然乾燥した木材と保存処理を施した木材が比較できるように展示されていたが、木材の状態の違いは一目瞭然で保存処理の重要性がよくわかった。薬剤のなかには高級アルコールなど、元興寺文化財研究所では取り扱っていないものも展示していたが、現場でどのような薬剤が使われているのかがよくわかった。

研究所という組織が、どのような状況で文化財を取り扱っているのか、またどのように作業をしているのか、などの実態を間近で見ることができ、今まで知らなかったことも多く知ることができた非常に学びになる見学であった。

日本・モンゴル民族博物館の紹介

L210775 北岡正充

城崎温泉や出石そばで有名な豊岡市の山奥の町である但東町には一風変わった博物館がある。日本・モンゴル民族博物館という博物館だ。パンフレットの紹介文によると、この博物館の目的は「国際理解教育」を様々な体験学習をとおして理解してもらおうとすることと、資料収集・調査研究・情報サービスも積極的に行い、広く利用者の学習の場となるよう努めていることの2点が目的であるという。但東町はちりめんが古くから盛んな町で、「日本国内におけるシルクロードのまち」として町おこしをするにあたり、モンゴルと交流が始まったことを経緯として、但東町に日本・モンゴル民族博物館が誕生した⁽¹⁾。

建物の外観は白く、周りの芝生とよく映えるが、とりわけ目を引くのは建物の前にあるチンギスハーンの騎馬像だ。館内には6つの展示スペースがある。そのなかでも館内で一番広い展示室にあたる「モンゴル草原の暮らしと文化」という空間がある。室内にはゲルが再現されており、実際に触れてモンゴル民族の遊牧の暮らし方を体感することができる。また民族衣装を羽織る体験もでき、モンゴル民族の文化を楽しみながら学べる。また豊岡市の山里の

暮らしと文化に焦点をあてた展示室や但東町の森をイメージした図書コーナーも設置されている。そして企画展示室もあり、モンゴルや豊岡市に関する事柄を取り扱った企画展を定期的で開催されている。

最後に私は豊岡市出身なのだが、小学校のときから市内の博物館の学芸員の方が何度か出前授業をなさっていたことを覚えている。小学2年生の時に国語で「スーホの白い馬」という題材を勉強するが、関連して日本・モンゴル民族博物館による出前授業が行われた。物語に登場する楽器の馬頭琴の音色を聴いたことや民族衣装を纏ったことで、物語のより深い理解へ繋がった。その後、博物館を家族で訪れたことも覚えている。このように教育の場で体験学習を実施しているのもこの博物館の大きな特徴である。

註

(1) 日本・モンゴル民族博物館ホームページ_Q&A
(最終閲覧日 2023/09/30)
<https://www3.city.toyooka.lg.jp/monpaku/QandA/qa.html>

文化財実習 夏期見学レポート

兵庫県立歴史博物館

L210776 北澤蒼梧

兵庫県姫路市にある兵庫県立歴史博物館について、見学で得た内容や感想、興味を持った事項についてまとめていく。

まず目に付いたのは、姫路城からすぐ近くにあるということもあり、姫路城の内容が多いということである。城下町のすがたを模型にしたものが大きくあり、領国の政治、経済、文化の中心として城下町が賑わっていた様子がよく分かった。また、姫路城築城の様子の模型では、石を人の力で一つ一つ運び、慎重に積み上げられているということが分かった。私がこのエリア内でいちばん興味を持った物は「お貸し具足」という武具である。これは不意の戦のために姫路城に備えられている、足軽用の鎧である。一般的な鎧とは違い、胴の脇の部分に棒を入れて組み合わせることのできる非常に便利でコンパクトな武具である。

兵庫県立歴史博物館では様々な常設展示がなされている。私が特に注目したいのは「ひょうごの祭り」である。兵庫県は祭りが盛んな県である。祭りは地域社会の中で脈々と受け継がれてきた。活気溢れる個性豊かな祭りと、そこで展開される民俗芸能が四季を彩る。祭りは収穫を祝うなど神事として行われるが、同時に人々が年に一度の楽しみを分かち合うことでもある。姫路市白浜町の松原八幡神社の秋祭りは、「灘のけんか祭り」として広く知られている。本宮では神輿練りが行われる。神輿練りを行うのはその年の年番に当たった地区で、3基の神輿を激しくぶつけ合う様子から「けんか祭り」の名が生まれている。屋台は中に大きな太鼓を仕込んだ神輿状のもので、播磨では「ヤッサ」とも呼ばれている。屋台が昇くものであるのに対し、車輪があり曳くようになっているものは檀尻と呼ばれる。檀尻は芸能が奉納される舞台となることもある。兵庫県の祭りでは他にも獅子舞が奉納される祭りや、踊りが奉納されるものなど、様々な祭りが各地で盛んに行われていることが分かった。

他にも現在の兵庫県のものになっている摂津、播磨、但馬、丹波、淡路の旧五国の古代から近世に至る歴史と、兵庫県が成立したのちの近現代のあゆみを紹介していたりと、地元民からすると面白いような内容が多くあった。姫路市のシンボルである姫路城の成り立ちやその歴史、兵庫県ゆかりの文化や美術品、昔の人々の暮らしを知ることができる施設であった。今回は展覧会を行っていない日に行ってしまった事を後悔している。次は期間限定の展覧会にぜひ行ってみたいと思う。

元興寺文化財研究所の实地見学を終えて

L210778 小谷彩翔

今回の实地見学では、元興寺文化財研究所にて文化財修復の現場では実際にどのように修復されているかを学んだ。

はじめに、一番関心を持った内容は木製品の保存修復についてである。その中でも、埋蔵されていた木簡の保存修理されていなかった場合の様子が強く印象に残った。今まで、木簡をメディアからみる

ことはあったとしても博物館に展示されているものや液体に使った状態のものを見ることばかりであった。しかし、今回保存処理をされていない木製品がどのようなものであるかを知り、守っていくためには樹脂で保存処理を行うことの必要性を改めて実感した。

また、木製品は木簡のような小さいものだけではなく本来ある木の大きさをそのまま使用したものもあるため、それらを保存処理する際に時間をかけて全体を樹脂に入れられるスペースの確保も必要となってくる。また伝世品についてはものによって石材やブリキなど多種多様な素材と形のものが存在する。そのため、それぞれの文化財に合わせて臨機応変に対応できる技術と空間が必要だと学んだ。

土器修復室では、バラバラになっている土器を接合しなおす作業が行われていたが後で外せるような樹脂を使用していることや人の手で地道に接合されている光景を目にして、土器への知識と技能があるからこそこのようなミスのできない地道な作業を行うことができるのだと感じた。そして、数えきれないほどある土器の破片から正解の破片をどのように選択しているのかまた、隙間のできてしまう土器を接合した時にどのような状況でその接合が成立しているといえるのかについて関心を持った。

記録資料修復室では、元興寺文化財研究所で代表的である漉嵌法について実際に見ることができなかったが研究所にあったパネルと説明していただいた内容で、文章の説明だけではイメージしづらかった「下から水を吸う」ということがどのようなことなのかを理解することができた。また、見学させていだいたときには何枚も重なっている紙を一枚ずつはがしていく作業をされていたが水分は文化財にとって深い関わりがあるのだと実感した。

文化財研究所の見学全体を通して強く印象に残ったことは、どの作業も地道で繊細な技術力があるということである。それぞれの方法について、知識をもっていただいてもそのためにどの程度のスペースが必要なのかについてと実際にどのような環境で作業されているかについてはわからなかったため、今回見学を通して実際に学ぶことができたと考える。

檀原考古学研究所附属博物館の見学を通して
学んだこと

L210779 小林永都

今回見学した檀原考古学研究所は奈良県にある途上跡や古墳など様々な埋蔵文化財を調査研究する施設で博物館施設もつく研究所である。博物館内では奈良市内で発掘された遺物を多く展示しており特に目を引くのがその一年に発掘調査が行われた現場から出てきた遺物を調査内容とともに展示してある施設である。これは奈良市内での発掘調査で発掘されたものが市民に知ってもらうことが少ない現状とその成果を知ってもらうために行われているもので訪れて説明を受けることで知ることができた。また当日に受けた説明ではリニューアルした檀原考古学研究所附属博物館では酸性ガスの発生によりオープンが遅れてしまったことを知った。この酸性ガスは遺物を展示する木材などから発生するもので遺物に被害を与えることになってしまう。これを防ぐために博物館内の展示ケース内に酸性ガスの発生を抑える機械を導入して工夫していることを見ることができた。また博物館のつくりに関しても面白い点があった。一つ目は博物館内に入る際、全室のように設けられている部屋が奈良市内で多く発見される古墳の石室を再現するように作られておりこの設備が博物館に必要不可欠である外の空気を館内に入れないための設備も担っている点である。次に博物館内に小規模なコンサートをできる会場が設置されている点である。通常の博物館でも講座を行うために部屋が設けられていることはあるもののあまり有効活用できているとは言えないがコンサートなど普段博物館に興味のない人でも気軽に訪れることができる仕組みは素晴らしいと感じる。

2023/09/29 文化財実習 夏季課題レポート
檀原考古学研究所附属博物館の見学について

L210780 笹山和寛

1.はじめに

この博物館の構造は、建物の中央に庭のようなものがありそれを囲うようにして建てられている。博

博物館は展示内容等に対応した建築計画がなされることが望ましいとされる。来館者の動きと、展示ケースの配置や動線について少し考えていきたい。

2. 博物館について

この博物館ははじめに特別展示の一室があり、常設展示の各スペースへと流れるような動線が確保されている。実際に見学してみると章ごとに分けられており順番に見て回ることができる。また、壁沿いの展示ケースと中央に独立している展示ケースとの距離が離れておらず後ろを振り返るとまた違う展示物が見られることが分かった。しかし、ある研究によると、観覧には三種類あり通過観覧・普通観覧・入念観覧がある。この内通過観覧と普通観覧の場合は展示室の角の部分の展示や、展示室内の独立展示ケースは見落とす場合が多く、目に入りやすい所に足を運んでいくことが分かった。一方で入念観覧はほぼ展示資料に対して観覧動線が引かれていた。独立展示ケースを観覧する順序は人によって一定していない。独立展示ケースの設置の際は、全体の流れの中の位置づけと。それに即した動線を誘導するなどの配慮が必要になる。その点から附属博物館は独立の展示ケースへの動線も確保されていてとても見やすい展示室になっていると感じた。また建物の構造的にも館内を一周することで入り口に戻ってこられるというつくりもいいと感じた。他の博物館は紫外線を入れないために窓がないようなところが多いが、展示室と展示室をつなぐ廊下には窓があり自分がどのあたりに居るのが分かりやすいつくりになっていると思った。

3. まとめ

今回は奈良県立橿原考古学研究所附属博物館に見学に行き、気になったところを少しまとめた。コロナ禍で博物館の改修を行ったらしくとても内装が綺麗だった。特に初めの展示室が石室の形をしていることに驚いた。動線の確保だけでなく博物館の内装構造にも惹かれるところがありとても興味深く感じた。

参考文献

1.(1993年3月)「博物館の展示・解説が来館者行為与える影響～博物館に関する建築計画研究～ 日本建築学会計画系論文報告集 第445号

「古代装身具に見られる魚について」

L210781 関元隆明

はじめに

私は橿原考古学研究所に展示された数ある出土遺物の中でも特に印象に残ったのは藤ノ木古墳出土の「金銅製履」と「魚佩」である。今も色あせずに金色に輝く様子からは古墳時代の人びとを魅了した遺物が持つ力を伺い知ることができた。注意深く観察すると沓の底部に魚をかたどった飾りが付属することに気付いた。そしてなぜ両者には魚が表されているのか疑問を持ったため、魚を現した装飾品の類例や意味、その後の展開について調べた。

本論

藤ノ木古墳は奈良県生駒郡斑鳩町にある円墳で6世中頃から後半頃のものとする。1985年から2006年にかけて6次にわたり発掘・調査が実施され、第3次となる1988年の調査の際に石棺の蓋が開けられて大量の副葬品の中に金銅製履が発見された。沓(履)は全長38.4cm、最大幅12.4cmと大変大きいうえ、ほぼ全体に歩揺がついているため実際に人が履いて使用したものではなく、儀礼用の品であったと考えられる。歩揺には先端が円形のものや魚形のもの二通りがある。同様の沓は日本では大将陣古墳(福岡県行橋市)、江田船山古墳(熊本県和水町)、金鈴塚古墳(千葉県木更津市)をはじめとした14例が、朝鮮半島では25例ほどが確認されている。

藤ノ木古墳がつくられた当時の日本は中国、朝鮮と積極的な交流を行うことで大陸の最先端の文物の取り入れを行っていた時期であり、金銅製履をはじめとした精緻な金属製品の制作は未だ日本人の独力では行えず、日本にあるものは基本的に大陸由来のもの、もしくは渡来人の手によるものだと考えられている。そのためこれらの製品については大陸文化の影響を反映したものであったといえる。

その代表的なものとして同古墳出土の鞍に当時日本には生息しない象が透かし彫りされている事例を挙げられる。このように彫金技術はもとよりそこに掘り込まれた紋様などに大陸の影響をみることができるのだ。

中国語では「魚」は豊かさを意味する「余」と同じ発音であり縁起が良いとされているため、大陸で魚にまつわる装飾品が用いられ、その風趣が日本にももたらされて権力者の間で重宝されたとされている。魚をかたどった装飾品として藤ノ木古墳ではもうひとつ「魚佩」が出土している。魚佩は腰に下げる魚形の装飾品のことで藤ノ木古墳のほか松面古墳（千葉県木更津市）や峯ヶ塚古墳（大阪府羽曳野市）など発見例は僅かで、大刀の飾りと推定されるものもある。多くの場合二匹の魚が向き合う双魚型をしており、杳と同様に金銅製で金色に輝いていた。全長は20cmを超えており、実用の有無は不明であるが、腰から垂らした場合その大きさと輝きでとても目立ったと推測される。古墳時代中期から後期の古墳には鉄製の甲冑や刀剣が増えることから、指導者の軍事的性格が強まったとされているが、金銅製履に付された魚と共に埋葬された魚佩は金色の美しさによって被葬者の生前の権力を誇示すると共に、黄泉の国や来世における被葬者の幸運を願って副葬されたと考えられる。

縁起物であることから重宝された魚を象った装飾品であったが、奈良時代に制定された養老令に基づく服装の装飾品には確認できず、代わってガラス玉や宝石類に糸を通してビーズ状にして腰から垂らす玉佩が用いられるようになる。その後、中国・唐で割符が装飾品化した魚袋が生まれて日本でも使用されるようになると、日本にももたらされて平安時代の貴族のうち公卿は金魚袋を、殿上人は銀魚袋を石帯の右腰のあたりから垂らして朝議に参列した。さらに時代が進むと屋根の上に鯨をあげるようになるが、これもまた魚にまつわる霊獣である。このように古墳時代に日本に輸入された魚を縁起物として担ぐ風習は形を変えつつ後の時代にも引き継がれていったのである。

おわりに

ここでは藤ノ木古墳出土の「金銅製履」と「魚佩」を例に挙げ、魚を現した装飾品の類例や意味、その後の展開について述べた。

【参考文献】

- ・『相馬市史 2 (各論編 1 論考) 上巻』相馬市編纂会 編 1978年
- ・『斑鳩藤ノ木古墳概報』奈良県立橿原考古学研究所編 吉川弘文館 1989年
- ・上田正昭『藤ノ木古墳と東アジア』テレビジョン学会全国大会特別公演 1989年
- ・『魚佩』羽曳野市 HP
https://www.city.habikino.lg.jp/soshiki/shougaigaku-shu/bunkasekai/bunkazai/bunkazai/iseki_shokai/kai-setsu/2324.html 最終閲覧日 2023/08/15
- ・『金銅製魚佩』文化遺産オンライン 文化庁
<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/530995> 最終閲覧日 2023/08/15
- ・『藤ノ木古墳 金銅製履』同上
<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/385131> 最終閲覧日 2023/08/15

【午後の見学会に参加しての意見・感想】

飛鳥・藤原京遺跡を世界遺産にすることを目指した見学会では、各遺跡に関する資料館を巡って世界遺産登録を目指す遺跡について理解を深めることができた。その中で感じた改善点について以下に述べる。

1、土中の遺跡や出土遺物、礎石基壇を配した展示が中心であるため、宮殿や屋敷の往時の姿が想像しにくい。

自分自身もそうだが、土器や瓦、礎石を見ただけではそれがどのように実際に使われていたのかなどがいまいちわからない。そのためただ陳列して文字による説明を行うだけではならないし、かといってそれらに様子を再現した映像ばかりでも「モノ」やその場所の空気を感じることができず想像の段階にとどまってしまうと思う。

平城京を例に歴史的建造物の復元を行うなど視覚的に伝えることが最もわかりやすいと思う。何か目玉になるようなものを復元することで博物館に対して敷居を高く感じる人でも公演感覚で気軽に足

を運べるのでは無いかと思う。田んぼと山が続いているだけではなかなか人が訪れてにくい。

ある程度考古学を学んだことがある人であれば、遺跡発掘時の写真を見ただけでその規模や構造が理解できる場合もあるが、幅広い年代層で多くの人に魅力を伝えるためにはやはり視覚による説明が1番だと思う。実物の復元が難しければ、絵画やCG技術による復元も可能でありそのあたりを検討すべきである。ただ、やはり「ホンモノ」や「歴史の舞台」が持つ歴史的な意味や説得力には劣るため、デジタル技術の使用は最小限に留めたい。

2、飛鳥・藤原遺跡が世界に誇れるものは何か、一般の人でもある程度共感できるようなわかりやすい説明が必要。

まず、飛鳥・藤原京が世界に誇れるものとは何かいまいちわからない。何よりも平城京を含めた各所に残る飛鳥奈良時代の都や宮の遺跡と比べたときに飛鳥・藤原京が持つ特異性などの説明が足りないように感じる。どうしても寺院建築が残り、復元建物も多く建造されている平城京遺跡と比較されてしまうため、飛鳥・藤原京遺跡だけでは弱く感じてしまう。そのため平城京との関連性を含めた価値の認識などを行うことも良いのではないかとも思う。

また、1でも述べたが建物の復元などを視野に入れた方が価値が伝わりやすく集客もある程度見込めるのではないかと思う。それらのツールを作った上でその次に情報発信方法を考えると良いと思う。X(旧 Twitter)をはじめとした SNS はもちろんのこと電車や駅での広告でも十分発信力はあると思います。若い世代を取り込むためには、やはり公園として整備して歴史的な地域であることはもちろんのこと家族で楽しめるような工夫をすることが大切であると感じた。

元興寺文化財研究所見学レポート

L210783 竹中彬子

私は夏期の学外実習で元興寺文化財研究所を見学した。元興寺文化財研究所は木製品や伝世資料、土器、紙資料、金属製品の保存修復とそれらの

文化財の調査を行なっている。木製品の保存処理については現在、生駒分室で行われている。この度の見学では生駒分室にある木製品の保存処理を行う研究室以外の研究室を見学し、各室の前に設置されているパネルと実際に修復作業が行われている職員の方々の姿を見つつ説明を受けた。1階の修復・調査が行われている現場を見学した際、室内にクレーンが備え付けられていることが印象に残った。大きく重い資料を取り扱う場合にはクレーン等の機械も使用しつつ作業されていると説明を受け、様々な機械を用いて文化財の調査・修復は行われており、使用する機械等の知識も必要であると改めて感じた。また、紙資料の保存修復と調査を行なっている記録資料調査修復室を見学した際に、パネルで説明されていた漉嵌法という技法に興味を持った。

記録資料調査修復室では対象となる紙資料の劣化状態を調査した後、主に漉嵌法という修復方法を用いて修復を行なっている。漉嵌法は吸引テーブルの上に対象となる紙資料を置き、そこに和紙の繊維を分散させた水を流し込んで吸引することによって欠損部分に繊維を補填する。その後、プレスしつつ自然乾燥させる。そのため、虫穴等の欠損を一度に埋めることが可能となる。和紙の繊維を分散させた水を流し込み吸引することで、「糊を使用しないため仕上がりがしなやかで、修復後の本紙の厚みが増えないのが特徴である。」

元興寺文化財研究所を訪れて、実際に文化財を調査・修復している現場を見学することができ大変貴重な経験となった。施設内を案内していただいた際に、文化財の保存処理は1回だけではなく一定期間ごとに繰り返し行う必要があると説明を受けた。そのためには文化財の原型の記録が必要である。漉嵌法は厚み等の原型を保ちつつ資料を修復することが可能であるため、資料の元々の姿を次の世代へと伝えることができることから、元興寺文化財研究所では紙資料の保存修復に漉嵌法が用いられているということも学んだ。

註

1. (財)元興寺文化財研究所 『(財)元興寺文化財研究所創立45周年記念「文化財の保存・修復の半世紀」』2012.10.27 p.p.42

実際に体験できる文化財

L210784 立花一佳

私はなら歴史芸術文化村を見学した。見学ツアーが始まる前に、木造組み立ての体験コーナーがあった。実際に誰でも組み立てることができ、当時の技術の高さを知ることができた。パズルのように気を組み立て、釘を打つ必要もなく、強度を保つ木組みがあるということを知った。

見学ツアーでは、まず多坐弥志理都比古神社本殿の屋根部分が紹介された。建立後は昭和52年に栓皮茸から銅板茸に変えたという。1999年に台風による被害で斜めに軸がぶれてしまった対策に修理が行われた。修理方針は解体修理だった。私は解体するのは一部だけと思っていたが全部を解体し、再び組み立てることに驚いた。再び組み立てる際に、老朽化している部分は新しい木材を使っているようだが、それでも出来だけ当時のものを伝えようと解体から再組立てまで細心の注意を払って復興に取り組んでいるとその場で感じた。

次に絵画や古文書の修理過程を見学した。休日だったので、研究者の方々はいなかったが、修理に使う刷毛や和紙・補修紙を実際に触れるように置かれていた。私が触れた刷毛は糊刷毛といい、小麦デンプン糊を美濃紙などに塗って絵画の裏面に張り付けるための役割をしていた。結構な大きさと、糊をぬる際の力加減が難しそうだと感じた。

見学ツアーが終わり、レプリカコーナーを見て回った。一番印象に残ったのは、玉眼の構造模型である。特に注目したのはその眼球の構造で、目と周りの木造は直接繋がっているわけではなく、本体の脇側に設置された木の棒で中の眼球を支えているということに驚いた。このような構造にすることで、リアルな脇と眼球の間の空間を作り出すことが出来るからだ。さらに、仏像の土台のレプリカで、像本体の二本の足から木の棒がそれぞれ伸びて、その足からはみ出た部分は土台の穴が開いている部分に指すことで、土台と本体の安定性を保つことができるというものがあった。

全体を通して、なら歴史芸術文化村では、組み立て体験や実際の修理に使われる道具、構造が簡単

に想像できるレプリカの説明があり、来客に沿った場所であった。

金属製品の保存処理

L210785 谷田朱里

元興寺文化財研究所の見学を通して、金属製品の保存処理は錆をすべて取れば良いというわけではないという気付きを得た。保存処理を行うのは、遺物を未来へと伝えることが目的であるため、いかに遺物を安定した状態で維持できるかに注力されている。そこで、現在どのような方法で金属製品の保存処理が行われているかについて興味を持った。

金属製品の保存処理は主に4工程で行われる。

1. 処理前調査・クリーニング作業
2. 脱塩処理・樹脂含侵
3. 接合・復元作業
4. 処理後調査

処理前調査の目的は、遺物の本来の状態と現状を把握することである。そのために肉眼での観察や写真・X線写真の撮影を行う。そして、その結果に基づいて行う処理の方針を定め、遺物に付着している土や錆を除去する。除去作業ではメスやニッパー、カッター、サンドブラストなどさまざまな道具が使用される。

2の工程は鉄製品と銅・青銅製品を区別し、異なる処理を行う。鉄製品はアルカリ性溶液に浸けて、錆の原因となる塩素イオンの除去処理を行う。銅・青銅製品はベンゾトリアゾール(BTA)を用いて遺物の表面に銅ベンゾトリアゾール(Cu-BTA)膜を形成させることで、錆びる原因となる物質から遺物を守る処理を施す。以上の処理を行った後、両製品にはフッ素系アクリル樹脂の減圧含侵が行われる。この作業は、金属製品の強化と、イオン以外で錆の原因となる酸素・水分の遮断による防錆が目的である。

それらの処理が完了してから、形状復元が必要な資料に関しては接合や補填を行う。接合や補填部分には、アクリル系樹脂やエポキシ系樹脂が遺物の形態や材質に合わせて用いられる。そして、復元箇所が分かりにくくなるよう周囲との色彩を合わ

せるために補彩作業がなされる。通常は、遺物との距離が 30 cm以内であれば区別が可能、1m以上であれば区別が困難な状態にする。

その後、処理が完了した金属製品は乾燥材や脱酸素剤と共に包装され、酸素量や水分量に注意しながら保管される。同時に、実際に行った処理方法やこれまでの処理の過程で得られた知見などを記録し、経過観察を行っていく。

以上が金属製品の主な保存処理工程である。遺物を今よりも永く伝世させるために、保存処理の方法はなお研究が続けられている。

参考文献

元興寺文化財研究所 HP 金属器保存研究室(最終閲覧日:9月28日)

金属器保存研究室 | (財)元興寺文化財研究所 (gangoji.or.jp)

千葉太郎「金属製品の保存処理」『関西大学博物館彙報』56巻、2008年、関西大学博物館

[https://kansai-](https://kansai-u.repo.nii.ac.jp/record/19934/files/KU-0200-20080331-04.pdf)

[u.repo.nii.ac.jp/record/19934/files/KU-0200-20080331-04.pdf](https://kansai-u.repo.nii.ac.jp/record/19934/files/KU-0200-20080331-04.pdf)

東北大学埋蔵文化財調査室 HP 遺物の保存処理(最終閲覧日:9月29日)

遺物の保存処理 (tohoku.ac.jp)

国立文化財研究院 HP 保存処理の紹介(最終閲覧日:9月30日)

保存処理の紹介 - 国立文化財研究院 (nrich.go.kr)

夏期見学レポート

L210786 出口新

自分は博物館とは違うかもしれないが、京都府東山区にある、琵琶湖疏水記念館を訪れた。

琵琶湖疏水館は、昔から、京都と琵琶湖をつなぎ、京都に水を供給し続けている琵琶湖疏水の歴史について当時の話や、疏水の仕組み、それらに関連する機械等が展示されていた。展示室は3部屋あり、第1展示室は、京都府での琵琶湖疏水工事計画の始まり、当時の地図や、工事に関する文章が展示されていた。琵琶湖疏水によってどのような恩恵がもたらされたのかがしっかりとわかる内容となっており、当時と今の比較がわかりやすかった。

第2展示室は、水の供給だけではなく、水力発電などでも、大きな役割を果たしていた琵琶湖疏水についての説明がされており、中には、実際にハンドルを回して、光をつけるなどといった、体験型の展示がなされていたため、子どもたちも楽しいものとなっていたのが良かった。琵琶湖疏水を利用し、京都の人がどのように街や暮らしを発展させていったのかが詳しく書かれていた展示で、昔の人々の叡智が感じられる展示となっていた。

第3展示室は現代の琵琶湖疏水について展示されていた。真ん中には当時、物資運搬のための船と疏水の水路の仕組みが、ボタンを押すと動く展示で解説されていた。

琵琶湖疏水の記念館の良いところは、琵琶湖疏水というものの自体が、屋外にもあり、当時のインクラインのドラム工場の跡や、水力発電システムの跡など、その時使われていたものが、大々的に置いてあることである。琵琶湖疏水という身近なものが、どのようにして出来上がっていったのかが、目で見てわかるような施設となっていて良かった。展示物や、展示内容こそ少ないものの、近くには蹴上インクラインや、その時の歴史の遺構が残っているため、それもセットで、この琵琶湖疏水記念館あるといっても過言ではない。街に広がる琵琶湖疏水の全貌がよくわかる地域の人々にも根付いた資料館であることは間違い無いと感じた。

檀原考古学研究所の見学会について

L210787 中尾有希

私は、8月10日に檀原考古学研究所の見学に訪れた。初めに、北井先生より博物館学的な観点からお話を聞かせていただいた。その中で、私が興味を持ったのはユニバーサルミュージアムとバリアフリーでは異なるということである。それまで、その言葉の意味もあまり考ええていなかったが、日本を訪れる人が増える中で、博物館の役割の「伝える」の在り方が多様的かつ分かりやすいものになる必要があると感じた。

また、北井先生から展示室内を案内していただいた。展示構成や展示方法などに対してさまざまな

意図が込められており、それを直接聞きながら見学ができたのは初めてに近い経験だったため面白かった。展覧会を構成するうえで重要になるのがエアタイトケースであるというお話があった。調べてみると、さまざまな展示方法を想定して多くのエアタイトケースが存在した。展示物の配置を考える際にも導線とこのエアタイトケースの種類、目玉となる展示物は関連しており切り離しては考えられないと感じた。また、このエアタイトケース内ではトレーサーガスを用いて気密性を測定する方法と圧力差を生じさせて気密性を測定する方法がある。このエアタイトケース内という密閉状態を保つ一方でガスが発生すると広がるのも早いときき、その密閉状態の中での安定状態を保つ難しさを感じた。

また、調湿剤の役割を果たす「アートソープ」についても今回の見学会で初めて知った。特徴として低湿度から高湿度までの広い湿度領域で吸湿し放湿することができ、さまざまな形態が存在することが挙げられる。さまざまな形態が存在することで、輸送時やその状況に応じて活用することができる。しかし、北井さんがおっしゃっていたことから費用がかかることは多くの文化財を有する施設にとって限界もあると感じた。

このように、文化財を守って伝えていくことには、さまざまな方法で安定を確立したうえでの展示が重要であると考えた。そして、理想的な展示にも限界があることから、有する文化財の性質を知り優先順位をたてて考えることが大切になると感じた。

参考文献

ITOKI“製品紹介”

<https://www.itoki.jp/solution/museum/display.html>
(閲覧日 2023年9月29日)

犬塚将英, 鳥越俊行, 石崎武志, 本田光子「九州国立博物館の壁付展示における換気回数, 温度, 相対湿度の測定」2005
<https://www.tobunken.go.jp/ccr/pdf/44/04410.pdf>
(閲覧日 2023年9月30日)

富士シリシア化学株式会社“製品一覽”<https://www.fuji-silysia.co.jp/products/p906/> (閲覧日 2023年9月30日)

私は今回富山県富山市に所在する秋水美術館に訪問しました。2016年6月11日に富山市中心街の賑わいの創生を目的とし、富山の医薬品メーカー「リードケミカル」の元取締役社長で日本美術刀剣保存協会富山県支部長でもある森政雄氏が自身の長年収集してきた約200点の刀剣・刀装具及び約1000点以上の陶芸品・絵画を展示するために開館された私設の美術館です。館の構造は鉄筋コンクリート地上四階建て、外壁は墨色のアルミ製を使用し、甲冑をイメージしたものとなっております。また、「秋水」というのは「曇りなき研ぎ澄まされた刀」を意味し、その名前からも察せられるように全国的にも珍しい刀剣関連をメイン展示に据えており、そのため県内外の刀剣ファンも足繁く通う場所となっております。コレクションとしては、刀工・正宗の兄弟子と言われる則重、天下三作の一人郷(ごうの)義弘(よしひろ)ら越中刀工の作品をメインに重要文化財6振りを含む10振りの刀剣に加え刀装具(拵、鏢など)計4点、そして横山大観や棟方志功ら日本を代表する作家の作品も所蔵されています。

今回私は開館1年にも満たない頃に訪れて以来の2回目とあって、かなり久しぶりの訪問となりほぼ初回に近い心で鑑賞してきました。現在(2023年8月時点)開催されている展覧会は「徳川家 大名家の宝刀」と題したNHK大河ドラマでその開祖である家康が注目を集めている徳川将軍家所蔵並びに伝来のものや加賀前田、薩摩島津家のものが集結していました。どの刀剣類も現在まで積んできた時代の重みを受けつつも鋭い切っ先から放たれた光沢による美を感じられ、連日の厳しい残暑の中に「涼」に出会いました。是非とも足を運んでもらいたいのですが、皆様に読んでいただいている頃は展覧会も終了し、同時に留意点にもなるのですが展覧会ごとに刀剣もしくは絵画・工芸品が展示されるのが変化しどちらか一方は展示されない期間が存在するため公式ホームページなどを必ず事前に参照をしてからの訪問をお勧めします。

[アクセス]

〒930-0066 富山県富山市千石町1丁目3番6号

TEL:076-425-5700

[開館時間・休館日]

10:00~17:00(入館は16:30まで) 月曜・火曜日(祝日

の場合は開館、その翌日に休館)、年末年始

その他展示替え作業による休館もあり。

[入館料]

一般 800 円(団体 20 名以上で一人 600 円)、大学生以下は無料

詳細は以下リンクよりご確認ください。

公式 HP <https://www.shusui-museum.jp/>

公式 X(旧 Twitter)

<https://twitter.com/morishusui?s=20>

檀原考古学研究所附属博物館について

L210790 西村雪

夏季見学の檀原考古学研究所附属博物館で、モノに対する照度の話とガラスの中の化学物質、モノの配置に興味を持ち、この中でも照度について考える。博物館の入り口の廊下では少し明るさを下げ、展示室の明るさに目が慣れるようになるという設計を知った。檀原考古学研究所附属博物館では展示室の照明がかなり明るく感じた。このような場合はあまり目を慣らす必要を感じなかった。反対に永平寺の瑠璃聖宝閣という宝物館に行った時、かなり展示室内が暗く、真っ暗の室内に微かなオレンジの光があるだけであった。展示品を見るときはかなり目を凝らす必要があった。更には目を凝らしてさえあまり細かい部分を観察することは難しかった。

展示室の照明は展示物の保存のために明るすぎる照明であってはいけないために、展示物の素材などによって明るさが定められている。また来館者にとって快適に鑑賞、観察できることも重要である。屋内の展示エリアの推奨照度は細かく決まっており、染織品や水彩画、日本画などの光に非常に敏感なものは 50 lx、油彩画や木製品、漆器などの光に比較的敏感なものは 150 lx、金属やガラスなどの光に敏感でないものは 500 lx である。また光色も基本は暖、中色であり、光に敏感でないものだけ涼色も使用される照明の位置に関しても、ガラスケース

に反射して映って鑑賞や観察の妨げにならないように、検討しなければならない。

これらの照明の決まりを考慮して展示室の照明を考えると、来館者中心に考えるのか、展示物の保存を中心に考えるのかで証明の明るさはかなり変わってくると考える。展示物の保存を第一に考え、照明の明るさを落とすのであれば、永平寺で私が感じたように展示物がかなり見づらく、展示の在り方に納得がいけない人も多数出てくだろうと感じる。一方で来館者のことを考え、照明の明るさを上げるのであれば展示物の劣化が早くなり保存に影響が出てくるのだろう。双方に重きを置くのならば、やはり二次資料や三次資料を積極的に活用していくことが重要になってくるのではないかと考える。

参考文献

Panasonic『美術館・博物館の照明』

<https://www2.panasonic.biz/jp/lighting/plam/knowledge/pdf/0209.pdf>(閲覧日 2023/9/30)

元興寺文化財研究所

L210791 西本将太郎

元興寺文化財研究所について、私は奈良文化財研究所や東京文化財研究所といった公的機関でなく、元興寺という寺の名前を冠した特異な文化財研究所という認識だった。その中で、8月30日に学外実習でこの文化財研究所を見学させてもらった。元興寺の修理・修復の際に出てきた仏教民俗資料などの研究が前身となって発足していったということは今回の話で始めて知った内容だった。また、現地調査・保存・研究・活用のそれぞれで部署を分けているが、個々がバラバラに動いているのではなく、それらがお互いに連携し合って、調査・研究・保存・活用を行っていることが分かった。文化財修理については、この施設では石造物・土器類・金属製品・紙本類の修復を見ることができた。木製品の修復は生駒の施設で行っているため見ることはできなかったが、保存処置の方法と使用される薬品については知ることができた。見学することのできた修復作業はどれも興味深いものだったが、その中でも石造物の修復は印象に残ったところだった。当日に行わ

れていたのは震災によって破損してしまった石塔の修復だった。経年劣化による文化財の修復だけでなく、災害による破損の修復も行っているということ、石の素材によって風化の度合いや脆さ変わるためそれに合わせた修復方法をとっていること、研究所に持ち込めない規模のものは現場で作業を行うことなどについて、担当の職員から話を聞くことができた。また、石塔の修復箇所を間近でみるのができたのだが、一目見ただけでは修復した箇所であるというのが分からないほど周りの箇所と変わらない見た目になっており、技術の高さを感じることができた。石造物の修復の横では浄瑠璃人形や燃えてしまった木製品、仏像の光背などが同時進行で修復されていた。最後に、施設見学で最初に感じたことは部屋がガラス張りになっていて、修復や調査・研究の作業風景を簡単に見学できるようになっていることは新しいと思った。また、それぞれの研究室で行われている作業についてわかりやすく説明したボードを置いていたり、今まで修復・調査に関わってきた物品の写真を並べていたりなど、私が文化財研究所に抱いていた閉鎖的という雰囲気を感じない、見学者が気軽にこの分野の仕事について知ることができる良い場所だと思った。

夏期見学レポート

L210792 萩田雅己

1. この夏に檀原考古学研究所附属博物館に訪れた。初めて行く方面だった事もあり、気分が上がった、実際の博物館内での案内はとても丁寧に時間をかけて説明をいただいた。博物館は多くの展示品があり、中でも惹きつけられたのが装飾品や墓のレプリカであった。写真でしか見たことのないようなモノが実際に見る事が出来たのは良い経験、目を肥やすための良いきっかけとなった。歴史に興味ある人には是非勧めてみたい場所であった。
2. 飛鳥・藤原を世界遺産に推進を目指すということで実際に現地を見て回った。杉山先生から何か情報面で良い方針、案が無いかと求められたので、友達と話し合い幾つか案を出した。しかしどれも今現在実践されている為、案を増やす事はできなかつ

た。その為日本ではなく、世界に目を向けることにした、幸い海外に友達が多くいる為、話を聞いてみた。

大体の人が今は友達に聞くとの事であった、日本を訪れたことのある友達や私の様な日本に住んでいる友達。Googleよりも日本人YouTuberの観光地案内、紹介をしている動画を見るそうだ。だが彼ら曰く、日本はアニメや漫画のイベントを調べても外国語で記載されている事が少ない為、苦勞しているとの声が多くあがった。日本語で調べるしか無いのが大変だったと。そこで一つの案であるがアニメや漫画のイベントが行え外国語対応も出来れば関心を向けられるのではないかと考えた。調べる人が多いが検索結果がないのであれば、競争率も低く外国からの集客に繋がるのではないかと思う。歴史に結びつけるのは楽だが飛鳥・藤原に結びつけるのは難しいかもしれない。やってみる価値は少しあるのではと思った。

夏期見学レポート

～元興寺文化財研究所～

L210793 蓮井怜香

私は8月30日に行われた元興寺文化財研究所の見学に参加した。今回の元興寺文化財研究所見学では実際に研究所内を見ることで、文化財の修復がどのように行われているのか具体的に知ることができた。前半は座学、後半は施設内の見学であったが木製品や石製品など種類別で部屋があり、設置している機械も部屋のレイアウトなども部屋によってかなり異なっていた。職員の方が見学中にされていたお話で一番印象に残っているのは、台風や地震が各地で多発しているため石製品の修復が最近増加しているというお話である。石製品を修復する理由は風化の為だと思っていたが、地震や台風などの自然災害で倒れて割れたからという理由もあるということを知り、文化財の保存修復にとって自然災害は大きく関わっているのだなと感じた。

ここで昨年度受講していた講義のなかで「文化財レスキュー」という言葉が出たことを思い出した。文化財レスキューとは災害時に文化庁の要請により組織され、被災した文化財の廃棄や散逸防止の

ため緊急に保護することを目的にしている。平成 7 年の阪神淡路大震災においてはじめて組織され最近では熊本地震の際にも組織されてるように、大きな自然災害が起きるごとに結成されている。実際に修復途中の文化財を見て、自然災害が日本で増えている中、こんな風になった文化財が全国各地に多くあって、なおすのにも時間がかかるため石製品のみならず文化財の修復は追いついていないのではないかと、それが今後の保存修復における課題ではないかと感じた。

今回の元興寺文化財研究所見学を通して、今まで座学で聞いてきた保存修復の現場に実際に足を踏み入れることで保存修復に対するイメージがはっきりしたものになった。今後博物館や神社仏閣に訪れる際は、文化財の保存修復の面も踏まえて鑑賞していこうと思う。

参考文献

文化財防災センター <https://ch-drm.nich.go.jp/> (最終閲覧日 2023 年 9 月 29 日)

文化財実習フィールドワーク(元興寺文化財研究所)
L210794 平田凌大

私は元興寺文化財研究所のフィールドワークに参加するにあたって、元興寺文化財研究所が保存処理を実施した、三ツ塚古墳から出土した修羅の保存方法について事前の学習をした。三ツ塚古墳の修羅の保存処理方法は大きく分けて 6 つの行程があり、①出土後の搬入 ②クリーニング作業 ③ポリエチレングリコール(PEG)含浸 ④表面処理 ⑤補填作業 ⑥補填部の補彩がある。この 6 つの作業の中で PEG の含浸について興味を持ち詳しく調べることにした。

ポリエチレングリコールは合成樹脂の一種であり、エチレングリコールが脱水縮合した高分子化合物である。医療品から化粧水などの日常生活でもよく使われることがある物質である。三ツ塚古墳の修羅のように出土した木材遺物には水分が含まれており劣化の原因になる。そのためポリエチレングリコールに含浸することによって、出土遺物内の水分をポ

リエチレングリコールに置き換え安定した保存状態にすることができる。ポリエチレングリコールにはさまざまな種類があり、三ツ塚古墳の修羅の含浸に用いられたポリエチレングリコールは PEG#4000 という種類であることが分かった。またこの物質を液状化するには約 60°C~70°C に保つ必要があり、含浸作業は極めて危険な作業であることも分かった。

今回の元興寺文化財研究所のフィールドワークでは同じように樹脂を用いた保存作業についても学ぶことができた。中でも土器を修復する際に用いられる樹脂について良く理解することができた。土器の修復作業では 2 種類の樹脂が用いられており、色がそれぞれ分かれている。オレンジ色の樹脂はエポキシ樹脂と呼ばれる樹脂で硬化が早い樹脂であり、土器自体の欠損部の修復に用いられているということが分かった。もう一つは白色の樹脂で硬化が遅く樹脂の模様部分に用いられることということが分かった。

以上のようにそれぞれの修復場面に適した樹脂がさまざまな修復現場で使われているということを知ることができた。今後はそれぞれの樹脂がどのような特性を持っているかを理解した上で、文化財に用いる際の課題などを調べてみたいと思っている。

文化財実習 夏期見学レポート

L210795 舟田涼乃

私は京都市で生まれ育っているため、今回のレポートではメジャーですが、京セラ美術館で開催されていた「ルーヴル美術館展 愛を描く」について紹介します。

この展覧会は、16 世紀から 19 世紀半ばまで 73 点の名画を通じて、西洋絵画における「愛」の表現を読み解いていくものです。第 1 章から第四章までで構成されており、第 1 章ではギリシア・ローマ神話の愛についての絵画が並んでいました。ギリシア・ローマ神話の愛は相手の全てを自分のものにしたいという強烈な欲望と一体となっています。愛の神であるアモルの愛の神の矢で射られた者は、その直後に目にした誰かに激しい恋心を抱きます。愛をテー

マとする神話画のなかには、愛の神アモルを扱った作品もあります。翼を持つ可愛らしい子どもの姿をしたアモルは、王侯貴族の宮殿や邸宅を飾る装飾画において、人気のモチーフでした。かわいらしい見た目のアモルが印象的でした。

第2章では、キリスト教の中の愛についての絵画が並んでいました。キリスト教の愛の考え方のなかで重要な位置を占めるのは、子が親を敬う愛を中心とする親子愛です。そこには、愛する者を所有するという古代神話の愛とは対照的に、愛する者のために自分を犠牲にする愛が見いだされます。冒頭で紹介する「ローマの慈愛」や「放蕩息子」のテーマを扱った絵画には、こうした犠牲的な愛の範例が描き出されています。

第3章では、印象ががらりと変わって、オランダ・フランスでの、現実世界に生きる人間たちの恋愛模様が盛んに描かれた絵画が並んでいました。第1章、第2章の神話や宗教を題材にした現実離れした絵ではなく、市井の人々の生々しいリアルな恋愛が描かれていて親近感を抱きました。

第4章では、田園の若い羊飼いや農民の清らかな恋をテーマにした「パストラル(牧歌、田園詩)」や、思春期の若者特有の両性具有的な身体や、古代神話の男性同士の愛を題材にした作品などが並んでいました。それらには、ロマン主義の特徴である破滅的な愛のテーマが見いだされます。これまで描かれていた「愛」の形とは打って変わり、悲劇的で異質な恋愛が描かれていたのが印象的でした。

参考文献

https://www.ytv.co.jp/love_louvre/#outline

保存修復と展示

L210797 政川綾音

元興寺文化財研究所を見学して特に印象に残ったものは、研究所の実績や実際に使用する機材を見学者向けに展示している紹介室である。保存処理に関わった遺跡などの記事をパネルとして展示していたが、その中でも木材を樹脂含浸によって保存処理したものを実際に見学者に触れてもらうという

取り組みが特に目を引いた。研究所を案内してもらった研究員の人は特に目立ったものではないといった様子であったが、私はこの取り組みはかなり珍しいものであると感じた。近年博物館や展覧会では触れる展示に注目が集まっている。しかし、個人的な意見としては触れることのできる展示物が配置されている博物館や美術館はまだまだ少数であると考ええる。だからこそ、触れることのできる展示物は印象に残りやすいと感じる。そこで、樹脂含浸処理をした木材を元興寺文化財研究所だけでなく展示施設のある他の寺社にも置いてもらうことで、文化財の保存や修復といった分野により興味を持ってもらえるのではないかと考えた。寺社では縁起や由来などを紹介するパネルが置かれていたり修復事業に関する記事や取り組みを展示していたりするが、縁起などを知らず足を止める人はいても保存修復の記事を見るために足を止める人は少ない印象がある。そこでその保存修復事業の紹介に樹脂含浸処理をした木材を並べ実際に触れてもらうようにすれば見学者の記憶にも残りやすくなるのではないかと考える。寺社が古墳や遺跡の出土品を所有していない場合全くもって関係のない展示となってしまうため注意が必要となるが、触れる展示は見学者の目を引き保存修復事業への興味の一端となるのではないかと思う。また、触れる展示は五感を使って体験することのできる展示でもあるため、視覚障害者や視覚機能の衰えた高齢者も展示物を見せることのできる対象となり、より幅広いアピールが出来るのではないかと思う。今回の施設見学を通して、樹脂含浸処理を施した触れる木材は使い方によってはさらに有益なものとなるのではないかと考えた。

夏季見学記

L210799 松井調

8月10日、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館にて行われた見学会に参加した。この博物館では橿原考古学研究所がこれまでに行ってきた発掘調査の出土資料を中心とする展示が行われている。学芸の北井先生に館内を案内していただき、橿原考古学研究所で行われてきた奈良県内の埋蔵

文化財の調査・研究の現状や、資料の展示の仕方・保存管理の方法などのお話を詳しく伺いすることができた。そこで資料の展示に欠かせない展示環境を保ついくつかのアイテムに関してのご説明があった。今回はこれについて調査し述べようと思う。

まず榎原考古学研究会附属博物館の展示ケースには気密性が非常に高いエアタイトケースが使用されている。これは外部の空気がケース内に入るのを防ぎ、ケース内部の湿度を安定させるのと同時にホコリや有害ガスの侵入を防ぐという構造を持つ。しかしその密閉性の高さゆえにケース内部の空気の循環が少なく、ケース内の照明による温度上昇とそれに伴う相対湿度の低下や、展示台などから放出されるガスが滞りやすくなるなど様々な問題が発生するのだそうだ。そこで相対湿度の低下を防ぐためにはアートソープを、ガスの影響を防ぐためにはケミカルフィルターを設置するといった対策が取られている。なお展示台は合板からできており、そこに用いられる木材や接着剤などからギ酸や酢酸、アンモニアやアルデヒドなどの文化財にとって有害となるガスが発生しているのである。これらのガスをそもそも出さないために展示台を作る際にも対策が取られているのだという。展示台を作成したのちすぐに文化財を載せて展示として使用するのではなく、台を二夏乾燥させておくことでガスが発生しにくくなるのだそうだ。しかし完全に発生しなくなるわけではないので、アートソープやケミカルフィルターを適宜設置し、文化財の劣化を最小限に抑えるため常にケース内の環境を整えておく必要がある。

今回の榎原考古学研究所附属博物館への見学会に参加し事後調査を行ったことにより、文化財を守り伝えていくための様々な優れた技術を学べたのは勿論だが、このフィールドワークを通して、文化財と向き合おうとしたときのこちら側の姿勢というものを深く考えることができた。技術的な修復のみが重要なのではなく、そこからの保存管理の方法や、多くの人に文化財の魅力を感じていただけるような展示方法、これらすべてが繋がっているのだと実感した。このような心の持ちよう、誠意こそ文化財と真摯に向き合うときに真に大切であると思えたことが見学会に参加した一番の収穫だと感じる。

<参考資料>

・株式会社オカムラ ミュージアム[美術館・博物館]総合カタログ 最終閲覧 2023/10/2

https://gmd.okamura.jp/iportal/CatalogPageGroupDetail.do?method=initial_screen&volumeID=OKM05&catalogID=26994290000&pageGroupID=27

・九州国立博物館 HP 博物館情報 博物館のひみつ 最終閲覧 2023/10/2

https://www.kyuhaku.jp/museum/museum_himitu01-01-07.html

文化財実習(イ)夏期見学レポート 講義とフィールドワークによる深い学び

L210800 松尾野々花

榎原考古学研究所博物館で行われた見学会で、学芸員の北井先生にご説明いただいた中で最も印象に残った二点を以下に示す。

まず一点目は展示室の照明である。博物館で遺物や作品を展示する際には、残された貴重な文化財の劣化を防いで後世に伝えるため、展示物の性質や保存状態に合わせて照明の強さが細かく規定されている。このことについてはこれまでの学びで知識を得ていたが、規定された照明の数値と体感が一致しているわけではなかった。榎原考古学研究所博物館の特別展示室は最大基準の明るさであると説明を受け、想像以上の暗さに驚嘆した。照明基準の知識だけを得るのではなく、自分自身で実際に体感して学びを深めることも重要だと気付かされた。また、榎原考古学研究所博物館では展示室内の暗さに目を慣らすため、受付から展示室前室にかけて徐々に照明を暗くしていく工夫を行っていると感じた。展示物にとって優しい環境であることはもちろんのこと、それぞれの博物館の環境に適応しながら来館者にとって快適な環境を提供することも学芸員の役割のひとつだと考えた。

次に二点目は、エアタイトケースについてである。展示物の温湿度を一定に保つため、エアタイトケース内は独立して湿度を管理している。温湿度を一定に保つには、空気の循環を緩やかにする必要があるが、展示台の合板などから放出されるアルデヒドがエアタイトケース内に滞留して展示物に悪影響を及ぼすことがある。これを防ぐため、エアタイトケース

内にケミカルフィルターを設置し、ガス成分を除去しているのだという。橿原考古学研究所博物館では指定文化財を多数収蔵していることから、ガスの放出がなくなるとされる約二年を経過してもケミカルフィルターを設置し、細心の注意を払っているようだ。文化財科学を学ぶ一人として、博物館の環境や保存に関する知見をさらに深めていきたい。

以上のように、橿原考古学研究所博物館の見学会に参加し、これからの学びにおける課題を確認できる機会となった。今回得た気づきを忘れず、日々の学びに取り組んでいきたい。

参考文献

三浦定俊、佐野千絵、木川りか 文化財保存環境学第二版 朝倉書店 2016年

石崎武志 博物館資料保存論 講談社 2012年

株式会社ミラプロホームページ事業紹介ケミカルフィルター株式会社ピュアテック

https://www.mirapro.co.jp/business/puretec_01/#:~:text=%E3%82%B1%E3%83%9F%E3%82%AB%E3%83%AB%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%AB%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%81%AF%E3%80%81%E5%BE%AE%E9%87%8F%E3%81%AA,%E6%94%B9%E5%96%84%E3%81%AB%E5%BD%B9%E7%AB%8B%E3%81%A3%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82 (最終閲覧日 2023年8月15日)

佐野千絵・小瀬戸恵美・三浦定俊 博物館施設の室内空気汚染 - ホルムアルデヒドの庫内濃度 - <https://www.tobunken.go.jp/ccr/pdf/36/pdf/03602.pdf> (最終閲覧日 2023年8月15日)

午後の見学会に参加して

午後の見学会で藤原資料館、明日香村資料館、県立万葉文化館を訪れ、世界遺産暫定資産の飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群登録に向けての問題と課題について四点考えた。

まず、一点目は復元されていない考古遺跡をどのように伝えていくかである。復元されていない建造物などを体感するためにVRがよく使用されるが、世界遺産登録を目指す上で既に組み込まれている手法をそのまま用いるだけでは飛鳥・藤原宮都ならではの魅力に欠けると考える。そこで、ARとVR技術を組み合わせたMRとプログラミングを掛け合わ

せた来館者体験型システムが可能であれば画期的ではないかと考える。まず、プログラミング技術を使い、部材ごとに解体した建築物を組み立てて建築物の構造をプログラミングの動作から学ぶ。その後、自分で組み立てた建築物をMRで探索する。VRは自分の意思に反して映像が進み、建築物の外観を眺めるだけのことが多い。しかし、自分の意思で映像を進めることができ、建築物の中まで探索できるMRを用いることができれば飛鳥・藤原の宮都独自の価値を見出せるのではないだろうか。加えて、仮想現実ではあるが普段は登ることのできない屋根に登って瓦を間近で見て、建築物の高さを体感できる機能もあれば面白いと考える。

次に二点目は、古都奈良の文化財の八つの構成資産とどのように差別化を図るかである。古都奈良の文化財は奈良市の市街地にあるが、飛鳥・藤原宮都は自然豊かな場所にあるため、「マイナスイオンを感じる飛鳥・藤原の宮都」などキャッチコピーをつけることも有効ではないかと考える。

三点目は、構成資産間の距離が遠いことである。限在、飛鳥村にある構成資産の一部古墳ではサイクリングで巡ることを勧めているが、飛鳥・藤原宮都をサイクリングで巡るには距離が非常に遠く、鉄道交通の便も悪い。すべての人にとって快適な環境を整えるために、電気自動車や水素自動車のレンタカーを充実させ、地元バス・タクシー会社と連携することも必要となってくると予想する。

最後に四点目は、世界遺産に登録された際に、どのように観光客を呼び込むのかという問題である。取り分け30~40代を顧客層と考えた場合、歴史をあまり知らない人を構成資産一本で呼び込むことは不可能に等しい。そのため、構成資産周辺に飲食店などを増やし、また来たいと思えるような魅力ある施設を増やしてリピーターを確保することも大切ではないかと考察する。そのような状態では遺産が観光に利用されるのではないかという意見もあるかもしれない。しかし、観光をしながら遺産に立ち寄り、そこから何かを得てもらうということは利用ではなく活用に分類されるのではないかと考えた。観光と連携する場合、学芸員や有識者が連携して遺産の利用を食い止めることも必要になるだろう。

以上が飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群登録に向けての課題であると考察する。

杉山先生が興味深い解説をしながら引率してください、午前・午後共に楽しく勉強になる見学会でした。ありがとうございました。

夏期見学レポート

L210801 南陸斗

・現地見学で得た知見や感想

多くの展示物が時代ごとに展示されており、時代と共に移り変わる文化や道具がよく分かるようになっていて見やすい展示内容だった。

博物館の展示に使われている展示ケースではケースをエアタイト化する事でより展示している文化財の保存状態をよくしたという説明を受けた。博物館には展示物を見に行くことが普通であると思うのでなかなかその展示物を囲っている展示ケースには目が行かない。博物館の展示や経営を学んでいるからこそ楽しめる、気づける博物館の展示物以外の良さを学ぶことができた。

・エアタイトケース

展示物である文化財を守るために使用される機密性の高い展示ケースのことで、ケース外の空気が入りにくい構造のため文化財には大敵の湿度の影響や細かい塵、有害ガス、害虫などが入り込むのを防ぎ、ケース内の環境を一定に保つことができる。

・展示品の環境

展示ケースだけでなく、ケース内における温湿度の調整や紫外線や照度設定など展示品における周囲の環境についても多くのことを学んだ。そのため、文化財を博物館で展示するための注意事項について少しまとめた。

展示ケース内の温度は22度、相対湿度は60%±5%を標準値とする。調湿剤を使用し、データロガーにより温湿度を計測し続ける。文化財に悪影響を及ぼすようなガスが発生する素材や接着剤を使用しないことなどが定められている。ここに挙げた展示品の環境の為の規定はごく一部であり、絵画や彫

刻、考古、書籍・典籍・古文書のような文化財の種類や各分野の材質ごとに注意事項が多くある。

・まとめ

展示ケースにはエアタイトケースのような種類があり、展示品を保護する目的でよりよい環境が整えられていることを知った。展示ケースだけでなく展示品を保護するために工夫されていることは多くありその一部として展示ケース内の環境を整えるための規定を挙げた。博物館には展示品だけでなく、光の調整や展示ケースでの工夫など見るべきポイントがまだまだあり、博物館の良さを感じることができた。

参考文献

1)「国宝・重要文化財の公開に関する取扱要項」資料 2-2 r1397990_05.pdf (bunka.go.jp) 最終閲覧日 2023/09/30

2)学芸員の仕事「懸仏エアタイトケースについて」学芸員の仕事「懸仏エアタイトケースについて」 - 鎌倉 長谷寺 観音ミュージアム (kannon-museum.jp) 最終閲覧日 2023/09/30

夏期見学レポート 帰省先での博物館見学記

—群馬県立歴史博物館—

L210802 宮崎なな

概要

群馬県高崎市の群馬県立歴史博物館は、1979年開館であるが、2014年より大規模な改修工事を行い、2016年にリニューアルオープンした。

展示内容としては、まず国宝展示室があり、2020年9月に国宝指定された「群馬県綿貫観音山古墳出土品」である銅水瓶や金銅製馬具などの副葬品と優れた造形の埴輪群像を観ることが出来る。その先は、原始・古代・中世・近世・近現代と、実物資料を中心に映像・模型などを用いて、時代の流れに沿った群馬県の歴史や文化が紹介されている。展示室以外にも、ライブラリーやタッチパネルで学習するスペースがある。

感想

国宝に指定された「群馬県綿貫観音山古墳出土品」の展示品は数も多く、埴輪はひとつ一つが大

きく、副葬品や馬具は煌びやかで立派であった。特に、副葬品の銅水瓶はなめらかな質感で美しく、埴輪の三人童女は3人が一つの埴輪で表現されているという点が興味深く感じた。見応えがあり、とても充実した展示内容であった。

原始から近現代までの群馬県の歴史や文化を時代の流れに沿った展示では、実物の資料だけでなく映像資料や、実際に触れて体験することのできるものもあり、子どもの見学者も多く、楽しそうに学習していた。

古墳時代までは特に資料が多く、群馬県がその時代に繁栄していたことがよく分かった。また、当時の群馬県では馬を育てて他の地域とやり取りしていたということを知った。近世の展示内容では、新田義貞の生い立ちから終焉までと、水戸天狗党と高崎藩の争いについての説明がなされており、教科書には書いていないことまで知識を深めることができた。近現代の展示内容はリニューアルオープンに伴い、以前よりさらに充実しており、群馬県民の慣れ親しんだ上毛かるたや富岡製糸場、群馬交響楽団、自動車メーカーのスバルなどの歴史を知ることができた。

展示全体を観ると、全ての時代を通して浅間山の噴火を描いた絵画や被害を表す資料が多いことが印象的であった。群馬県はいつの時代も浅間山の脅威に脅かされてきたと同時に、温泉などの恵みも享受していて、常に火山と共に過ごしてきたのだなということを改めて実感することができた。

文化財実習 元興寺文化財研究所見学記

L210803 村崎結愛

元興寺文化財研究所は、修復する施設が木製品や金属製品、土器、紙資料などの分野別で分かれている。そして、全国から運び込まれた修復・保存が必要な遺物資料に対して、念入りな調査をした後、適切な処置を行っていることが分かった。修復や保存の工程も明確に体系化されている。各分野の専門家たちが文化財に対して責任を持ち、真摯に向き合う姿勢が感じられた。

見学の際、最も印象深かったのは、金属製品の保存修復の様子である。金属製品の遺物には、武器や武具、硬貨、鏡などが存在する。通常の金属製品の遺物は、錆で覆われており、保存状態を観察・調査する段階から始める必要がある。調査では、X線写真や顕微鏡などを用いて対象物の材質や構造を明らかにした上で、処理方法を決めていく。調査後、不要な泥や錆を取り除き、可能な限り本来の形に近づけるクリーニング作業を行うが、それは手作業だったため、非常に驚いた。作業が手作業なのは、調査結果を基にしながらか、材質や構造に合わせた、慎重で微細な動きが求められるからである。金属製品は繊細に扱わなければならないため、研究員の方々は黙々と作業しており、緊張感が感じられた。

近年、ブリキ製玩具や電気ではなく氷で内部を冷やす木製の氷式冷蔵庫など、近現代の製品も文化的価値が高く評価されている。そのため、研究所は修理の依頼が持ち込まれた際は、それらも必要に応じて受け入れている。氷式冷蔵庫は大半が木製であり、家具の綺麗な部分を用いていることが多い。さらに、高級モデルであれば、オーク材でできた棚や装飾的な掛け金、洗練された脚までついており、一種の芸術作品の体を成している。氷式冷蔵庫が木と金属の複合文化財の枠組みに位置するのならば、家電であったとしても、その修復は一般の修理業者では力が及ばないだろう。

元興寺文化財研究所が近代以前だけでなく、近現代の品々も取り扱っていることを知り、修復に携わっている方々の技量の高さに対して、深く感銘を受けた。最後に、貴重な時間を割き、現場を見学する機会を提供して下さったことに、今一度感謝を申し上げたい。

文化財実習 夏季見学レポート

L210805 藪中美月

文化財実習の一環として元興寺文化財研究所を見学させていただいた。施設を見学するとともに研究所の方の説明を受けることでより理解が深まった。見学するまで元興寺周辺で出土した文化財の保存修復だけを行っている機関だと思っていたが、

保存修復だけではなく発掘調査や全国各地の出土品、文化財の保存修復を行っており、奈良県内だけではなく幅広く活動していることを知った。文化財の保存のための現場を近くで拝見することは貴重な機会である。使用している道具やどのような方法で保存修復を行っているのか詳しく知ることができたので非常に勉強になった。見学を終えて気になった点を複数挙げる。

元興寺文化財研究所では保存科学グループ、文化財調査修復研究グループ、埋蔵文化財研究所グループに別れており、主に文化財調査修復研究グループと埋蔵文化財研究グループを見学した。文化財調査修復研究グループでは、古文書や掛け軸などの記録資料が扱われている記録資料調査修復室を見せていただいた。この部屋では虫による欠損、汚損、酸化劣化などの損傷のある記録資料の劣化状態調査、保存環境調査を行っている。欠損部分には、紙の繊維を水に溶かして欠損部に補填する漉嵌法を用いる。この漉嵌法を用いることで可逆的な保存修復が可能となり記録資料の原形をなるべく変えないことが可能となる。埋蔵文化財研究グループでは、土器修復室を見せていただいた。以前保存修復をした土器や埴輪でも定期的な保存修復が必要となる。保存修復を必要とする土器や埴輪の作業工程で最初にするのはX線での撮影を行い解体することだ。X線での写真をもとに以前の保存修復で使用されたエポキシ樹脂や石膏をはじめとする補填剤を除去していく。その後、解体した破片を並べて写真撮影をして再び解体した破片を組み立てていく。

元興寺文化財研究所の見学を通して、それぞれの史料にあった保存修復を行う必要性を改めて実感した。これからも文化財を残していくためには定期的な調査や保存修復は欠かせない。

なら歴史芸術文化村修理工房見学ツアー

L210806 山口千穂

建造物修理工房・考古遺物修理工房・絵画書籍等修理工房・仏像等彫刻修理工房と4つの工房を専門職員の案内のもと巡るツアーとなっている。実

際に職人さんたちが修理している所を見ることができる。

建造物修理工房では多坐弥志理都比古神社の修理をしている。1棟1000個も部材があり、部材一つ一つの写真を撮るといった説明を受けた。実際に台鉋とやりがんなで削った木やかんなくずを直接触って違いを感じることが出来る。台鉋で削られた木の表面を触ると、つるつるしていた。やりがんなの方は少してこぼこしていた。実際に職人さんがノコギリを使っている所やのみや鉋が展示されているのを見て、文化財の修理には伝統的な大工道具を使う技術があることがわかった。

考古遺物修理工房では柳本立花遺跡の盾形埴輪など天理市内の古墳、遺跡の遺物の復元を行っているところを見ることが出来る。接着剤としてセメダインを使っているということを知った。膠などの昔ながらの接着剤を使っていると思っていたので、セメダインを使っていることに驚いた。

絵画書籍等修理工房と仏像等彫刻修理工房の見学ではツアー参加者のみにしか入れない場所がある。絵画書籍等修理工房では絵画の修理の工程の説明を受ける。絵画の折れ癖や汚れ、虫食いなどを直す技術により絵画を綺麗にする。絵画修理の裏打ちに使用される宇陀紙や、美栖紙、美濃紙などに触り、違いを楽しむことができる。

仏像等彫刻修理工房では美術院が當麻寺の仁王像の修理をしているところを見ることが出来る。當麻寺の仁王像の修復が始まると、頭部にニホンミツバチが巣を作っていることがわかり、ニホンミツバチを守りながら修復することを決めた。光堂寺の四天王像の修理中の姿を見ることができた。そして仏像は空洞がないと割れやすいということを知った。

数ヶ月から半年に一回このツアーに参加し、文化財が修復されている過程や、どんどん完成されていく所を観察するのも面白いだろう。

参考文献

「仏像もミツバチも守る 葛城・当麻寺 頭部の巣取り出し 仁王像修復」読売新聞 2021年5月26日 朝刊

今回文化財実習の学外実習にて橿原考古学研究所附属博物館を見学し、気になった点を中心に調べ、まとめていきたいと思う。

この博物館では、常設展示にて旧石器時代から平安～室町時代の遺物を主に展示・解説しているが、私が最も興味を持ったのは、弥生時代の「祖霊の世界」エリアに展示されている屈葬された人骨である。何故この展示に興味を持ったのかというと、私が小学生の時に資料集で見た写真の実物がそれであったからという理由と、とても早い段階から神や霊の存在を信じ、それらを意識した埋葬の方法を取っているのが面白いと感じたからという理由の二点である。

そもそも屈葬とは、埋葬の時に死者に手足を折り曲げた姿勢を取らせる方法、またそのような状態のことである。一口に屈葬と言っても死者の姿勢によって様々な種類があり、仰向けの姿勢である仰臥屈葬、横向き、脇腹を下にした姿勢である横臥屈葬、うつぶせの姿勢である俯臥屈葬、また上体を立てた姿勢の座位屈葬というものも存在し、さらに屈葬の程度にも、膝頭が胸に密着するレベルのものもあれば、伸展葬というには膝が曲がっており伸展葬を意識していないと思われるものまで様々である。

屈葬を行う目的は、墓坑を掘る労力の節約、休息の姿勢を取らせる、胎児の姿に似せることにより再生を祈る、死者の霊が生者へ災いを及ぼすことを防ぐため、などの説がある。

縄文時代から存在する権力を象徴する勾玉などと比べ、この屈葬が行われたのと同じ時期に発展した青銅器文化には「神」を意識した道具が多く見られる。つまりこの時代から日本人の神道意識というものが表面化し、それと同時に「霊」を意識することも増え、埋葬の場所や形、そして姿勢にまで影響を及ぼしたのではないかと考える。

正しい埋葬、死者の霊に配慮した埋葬をしたから災いが起こることは無い、という安心感のようなものが土台になり、より弥生時代の耕作文化を発展させたとも言えるのではないだろうか。

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館での見学を通して、1・2年生の頃に学んだ博物館に関する知識が思い起こされる機会が多くあった。ユニバーサルデザインや文化財に当てる照明の明るさ、文化財に影響を与える有害物質であったり、免震であったりと他の博物館見学ではまず聞き、学ぶ機会のないことだったので、実際に展示を見ながら思い起こすことができ良い勉強の機会となった。博物館の展示というと、今までに訪れたところでは覚えている限り時代ごとに文化財が並べられているのが普通だったが、橿原考古学研究所附属博物館では旧石器・縄文・弥生・古墳時代など大きな時代区分はあるものの、時代の流れで魅せる展示ではなくテーマで魅せる展示方法をとっているスペースが多く、私としては目新しいものだった。文化財を扱う博物館において、テーマごとに展示するというのは珍しいものなのか、それともそうでもないのか気になったので『博物館学入門』を見ると、種類によって分類をする際はこの分類自体には時間的区分がないため、年代的順序をその中で設ける必要があるということが記されており、この博物館では時代の流れに関係なく展示しているということだったので、年代的順序が加えられるとより学びの場としてよくなるのではないかと感じた。

他にも、大型円筒埴輪についてどのように作ったのか、どのように焼いたのか、どのように運んだのかははっきりとしたことが分かっていないという話を聞き、現代では科学など様々な分野が発達しているにもかかわらず解明されていないことがあるということに、昔の人は現代人の思いもよらぬ方法を用いていたのだろうなと思うと同時にいつか解明されるかもしれないと思うと楽しみだなと感じた。

今回の見学では、実際に博物館で働き、展示に携わっている方からのお話を聞くことができ、文化財を展示する際にこだわった部分や文化財に関する熱の籠った解説、クスッと笑える話、博物館の構造など自分一人で行っては知ることのできないことをたくさん教えていただいたことで、それまで地域の

考古遺物を見てもあまり面白いと思えなかったのが、学芸員の方から話を聞いて知識を得て見ると、展示はこんなにも面白く感じるのかということを知ることができた。

〈参考文献〉

日本博物館協会『博物館学入門』理想社 1956年 p.145

帯留めの魅力

春秋戦国時代の華麗なアクセサリ

L212009 瀋欣怡

夏休みに、浙江省博物館で開催された中国古代の帯留め展覧会を訪れる機会を得た。この展覧会は私を遠い春秋戦国時代に連れ戻し、その時代特有の文化と芸術品を探求させてくれた。帯留め、一見地味なものですが、古代社会の豊かな内面と多彩な生活を示すものであり、その魅力に心を奪われた。

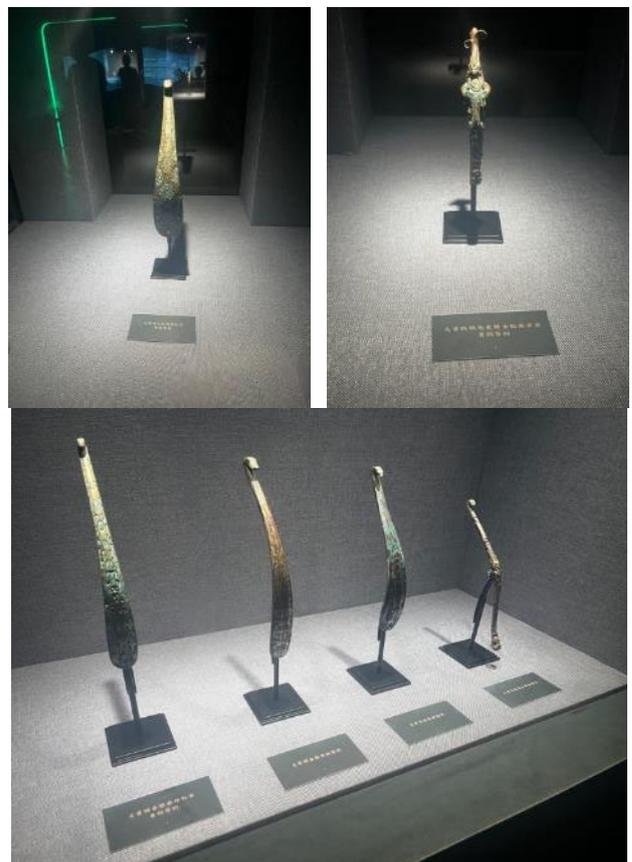
帯留めは、古代の王公貴族、文人、武士によって使用される重要な衣類のアクセサリとして、実用的な道具に留まらず、芸術でもある。展覧会で展示された帯留めは、さまざまな側面からその時代の栄光と独自性を示している。まず、それらの起源は良渚文化に遡ることができ、古代文明の歴史の長さ感叹した。そして、春秋戦国時代は帯留めの栄光の時代とされ、さまざまな帯留めの形状と華やかな模様が、当時の美意識と職人技術の高度な発展を示している。私は特に、鏤金、貼金、錯金銀、翡翠、美しい玉などの技法が使用された貴重な帯留めに感銘を受け、それらは豪華で精緻な雰囲気を放っていた。

この展覧会は、戦国時代の帯留めに特に焦点を当て、私をその活気に満ちた時代にタイムトラベルしたような気分させた。これら古代の装飾品を鑑賞することで、当時の社会の物質生産と生活様式についてより深く理解することができた。帯留めは単なる装飾品に過ぎず、歴史の証人でもあり、時代の風情と美の追求を体現している。

展覧会のハイライトの一つは多元文化の展示だった。帯留めの多様性は、異なる国々と地域の美意

識と文化的特徴を反映しており、当時の文化交流と思想のぶつかり合いをより深く理解できるようにした。この展覧会を通じて、春秋戦国時代の「百花齊放、百家争鳴」の文化の盛況を実感した。

総括すれば、この展覧会は、古代文明の魅力と多彩さを十分に楽しむ機会を提供してくれた。帯留めは単なる装飾品に過ぎず、歴史、文化、芸術に関する素晴らしい章となっている。帯留め、単なる装飾品に過ぎないものではなく、時光の旅の入口であり、私たちが春秋戦国時代の栄光に連れて行ってくれるものである。



(2023年8月17日 瀋欣怡撮影)

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館を
現地見学して

L218018 大川由翔

私は現在、大学3年生である。しかし、今年度から龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻に編入学した学生である。これまでの2年間は、同大学文

学部歴史学科日本史学専攻に所属しており、文献を読んで研究するという日本史学研究的アプローチで日本の歴史について学んできた。それに対して文化遺産学専攻では、「物(もの)」を研究対象として研究していくという、全く異なったアプローチで研究していく。文化遺産学とは、現代まで引き継がれてきた文化遺産を分析・研究し、将来に残して活用するためにはどのようにしていくべきなのかというようなことを編入学して半年間という短い期間のなかで学んできた。また私は現在、龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻の考古学ゼミに所属しており、日々考古学の研究に励んでいる。そんな、2つの専攻に所属したという特異な経歴を持つ私だからこそ、今回の奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の現地見学で得た知見や感想、興味を持ったことがあったため、それらを挙げていこうと思う。

一つ目は、写真ではなく実際に実物の「物(もの)」を見ることによってそこから見えてくるものや感じる迫力があったということである。博物館に展示されていた展示品の中に、博物館の目玉展示ともいえるとても大きな形象埴輪があった。それが目に入った瞬間の迫力と驚きは言葉には言い表すことのできないようなものだった。また、そのような巨大な埴輪が当時古墳にあったということを想像すると、古墳に埋葬されていた被葬者はとても大きな権力や影響力を持っていただろうと容易に推測できた。このように、実際に「物(もの)」を見るからこそわかっていくことがあるということ学んだ。

二つ目は、博物館展示の仕方について学ぶことができたということである。当時の祭祀や生活、建物などの様子を再現した模型が展示室のいたるところに展示してあった。なかには、30年ほど前につくられた模型があった。その模型について学芸員さんは、「30年前、この模型をつくった当時の学芸員さんはすごい。この模型が作られた当時は、実際に昔の人々が実際にやっていたのか確証をもって言えなかった祭祀の方法だったものを当時の学芸員さんは模型に表したが、その模型に表現した祭祀の方法を立証する出土品が出土し、その後多くの取材が来たことがあった。」と当時の学芸員さんを称賛しておられ、当時の学芸員さんの研究の精度が高

かったということがいえるとともに、研究や模型づくりに対する努力の結晶を感じる事ができた。

三つめは、展示品を守るため、温湿度の管理が徹底されていたことを学ぶことができたということである。現地見学の終盤にバックヤードの見学をさせていただいた。その際、博物館では当たり前のことなのかもしれないが、厳重に温湿度の管理をしているというお話を聞かせていただいた。また、バックヤードに粉じんなどが入らないよう、入室できる人も制限しているということもお聞きし、展示品を後世に継承していくための方法や努力を学んだ。このように文化遺産の保存の観点からも学ぶことができた。このように、フィールドワークをとおして実践的に学ぶ文化遺産学専攻でしかできない学びを今回の奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の現地見学に行ったことで学ぶことができた。また、文化遺産学の興味深さを改めて知ることができた。

最後に

見学記から見学で興味をもち自ら課題を調査したレポートまで内容は千差万別であるが、文化財実習で教えきれない調査や修理現場を受講生が体験できたと感じられた。これもひとえに見学を受け入れて頂いた研究所、博物館の皆様のおかげであり、再度感謝申し上げます。また、文化遺産に関わる人材教育として、見学を機により一層文化遺産へ興味を持ち、将来的に文化遺産に関わって続けてほしいと思います。

(山田)